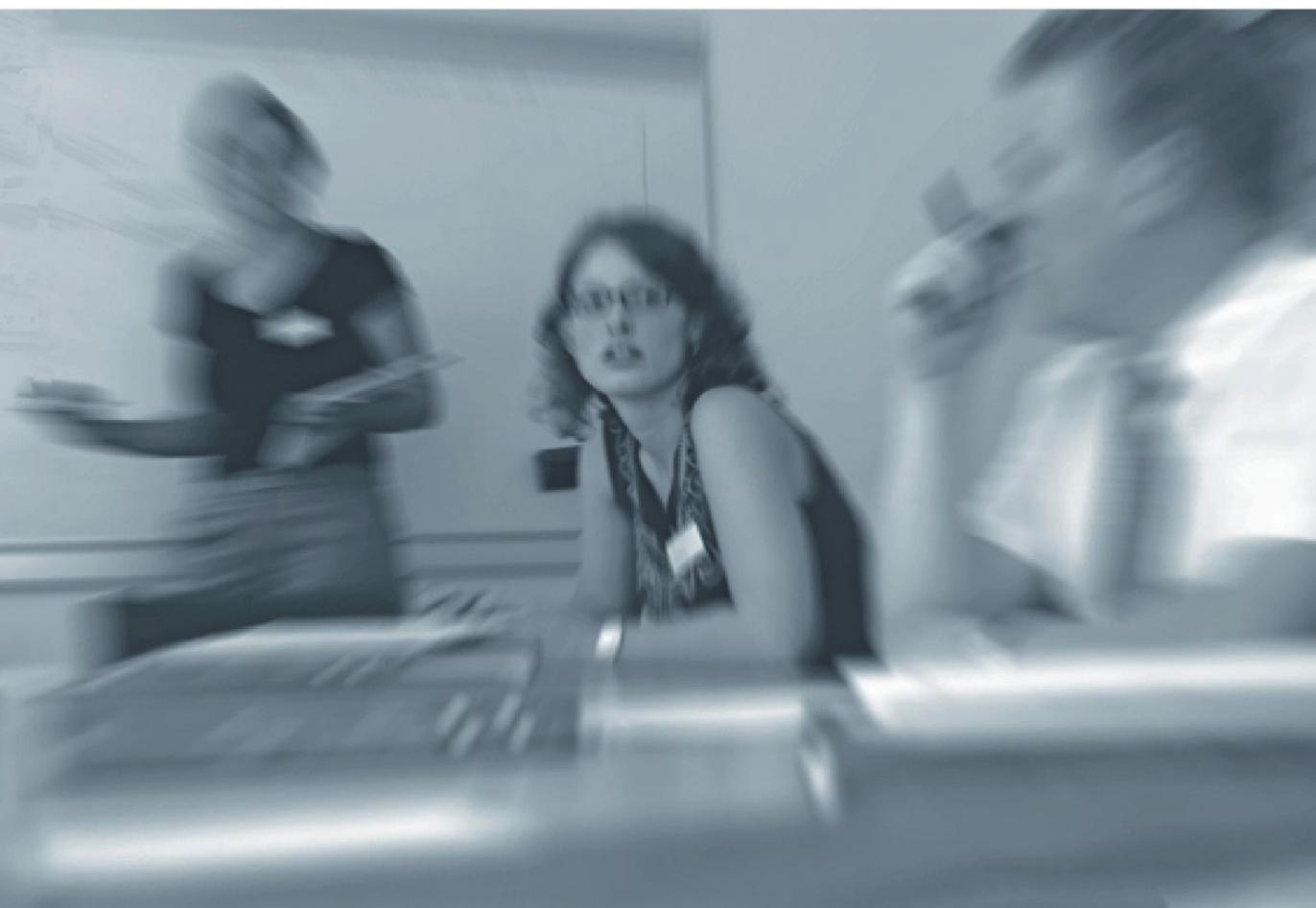


『言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)』 教職課程における活用方法

編集：清田洋一, 浅岡千利世, 高木亜希子



JACET教育問題研究会

JACET SIG on English Language Education
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/>

『言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)』
教職課程における活用方法

編集：清田洋一，浅岡千利世，高木亜希子

JACET 教育問題研究会
JACET SIG on English Language Education

はじめに

教育問題研究会では、教師の授業力の省察ツールである J-POSTL の開発と活用方法の研究に取り組んできました。本プロジェクトの目標は、教員養成段階での英語教師教育の質を上げるために、教職課程における J-POSTL の効果的な活用方法について研究することにあります。

J-POSTL の基本的な方針は、「言語教育の目標が生徒の人格形成であり、真の言語能力育成のためには生徒・教師ともに継続的な省察が欠かせないことを全体で確認すること」です。その方針に沿って、メンバーが実践している教職課程における指導方法とそれに伴う効果的な省察方法のアイデアを検討してきました。実際の取り組みとして、J-POSTL を教職課程で活用している大学の教員を中心とした研究会において、グループディスカッションやリフレクティブエッセイなどの教職課程の授業場面や指導法をとりあげながら論議・研究を進めてきました。

本冊子はこの教職課程活用プロジェクトの成果をまとめる形で構成されています。編集においては、J-POSTL の源流である EPOSTL に関連した *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (Newby, et al., 2011) に示唆を得ています。特に Orlova(2011) が推奨する EPOSTL 活用の 6 段階を共通の枠組みとして、教職課程における J-POSTL の実践に取り入れています。

J-POSTL 教職課程活用プロジェクトの具体的な研究目標は、以下の 3 点となります。

- ① 「CEFR の理念と Can-do の意義」「J-POSTL の活用方法」について周知し、理解を図ること。
- ② グローバル市民を育てる言語教師のために、J-POSTL を活用した教員養成課程の授業例を提案・実施し、活用のあり方を共有すること。
- ③ 最終的に「J-POSTL 活用事例集」を発行すること（本冊子）。

編集組織

編集統括： 清田 洋一 明星大学教授
編集委員： 浅岡 千利世 獨協大学教授
編集委員： 高木 亜希子 青山学院大学教授

目 次

解説編

教職課程における J-POSTL の基本的な活用方法と課題 ……………	6
清田洋一	
J-POSTL の 6 段階の活用法……………	13
浅岡千利世	
EPOSTL の活用事例から J-POSTL の導入への示唆 ……………	18
高木亜希子	

実践編

教職課程における履修段階に応じた J-POSTL の活用……………	26
吉住香織	
「英語科教育法 II」における J-POSTL の活用 ……………	42
教育実習における J-POSTL の活用 ……………	51
大崎さつき	
「英語科教育法特論」における J-POSTL の活用 ……………	56
高木亜希子	
教育実習における J-POSTL 活用の取り組み ……………	66
浅岡千利世	
英語科教科法の授業における J-POSTL の統合的な活用 一通信課程における実践 ……………	73
清田洋一	

付録

『言語教師のポートフォリオ』導入へのストラテジー ……………	86
--------------------------------	----

解説編

教職課程における J-POSTL の基本的な活用方法と課題

1. J-POSTL の紹介と教職課程における基本的な使い方の紹介

本章では、J-POSTL の概要と、教職課程における基本的な使い方、さらに課題について解説します。

1.1 J-POSTL の概要

(1) EPOSTL の翻案化と基本理念

J-POSTL は、EPOSTL「ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ」(*the European Portfolio for Student Teachers of Languages*)(Newby et al., 2007)を日本の外国語教育の教育環境を考慮して、翻案化したものです。EPOSTL にはヨーロッパにおいて研究されてきた言語教育の多くの知見が含まれています。また、J-POSTL は、履修学生が、教職課程や実習先で学んだことを継続的に記録し、自分の成長に役立てるためのものです。成長を記録し振り返ることで、自己の長所や改善点に気づき、教職に対する気づきや学びが促されます。

(2) 基本的な内容

J-POSTL は、教師の自律的な成長を目指すポートフォリオとして、いくつかの部分から構成されています。その中心となるのが Can-do の形式の記述文です。それは、195 の自己評価記述文から構成されています。EPOSTL を源泉とした本ポートフォリオの優れた点は、その背景に作成されるに至った、しっかりした理念があることです。これは、単に授業力の how to として使用するのではなく、ポートフォリオの様々な活用の可能性を意味します。そこで、J-POSTL の理念として、特に次の 2 点を強調したいと思います。

- ・ 行動志向の言語観(Action-oriented view of language)
- ・ 生涯学習(Life-long learning)

行動志向の言語観では、言語教育は、場面・概念・機能シラバスによる、人同士の交流(インタラクション)を中心としたコミュニカティブな指導法(CLT)が理想的な教授法と考えられています。一方、生涯学習については次のように考えられます。これまでの日本の学校英語教育では、「(英検や TOEIC などの)能力試験で良い成績をとる」、「入試に合格する」、「仕事で使

える」という英語力が目標とされ、学習者の動機付けとなってきました。しかし、こういう目標は、短期または中期的な目標にはなりえても、学習者個人のニーズや適性に沿った継続的な学習にはつながりません。これらに代わる、英語学習の長期的目標や、内的動機付けとなりうる観点が生涯学習となります。生涯学習を実現するためには、学習者自身が自分の学習の価値を理解し、そのための学び方を身につけること(learning to learn)が必要です。

1.2 J-POSTL の教職課程における使用

(1) 目的

J-POSTL には大きく、以下のように3つの使用目的があります。

- ・大学の教職課程での授業
- ・教育実習
- ・現職教師

このうち、本書では上記の2つ(大学の教職課程での授業、教育実習)での活用をテーマにしています。大学の教職課程では、J-POSTL の活用は以下の目的を達成する上で効果的です。

- ・英語授業力の構成要素を明らかにする
- ・英語授業力を支える知識・技術を振り返ることを促す
- ・履修生の議論を促す
- ・履修生同士の自己評価を促す
- ・成長を記録する手段を提供する

(2) 活用の制度化

J-POSTL の活用効果を最大限発揮するには、漠然とした使用ではなく、大学の教員、学校の指導的な立場の教師、課程に所属する学生にとって、明確な使用目標を持って、「制度化」することが必要です。「制度化」とは、教職課程のどの時期にどのように使用するのかを明確にすることです。たとえば、以下のような状況が考えられます。

利用場面①

教職科目における講義

利用箇所:自分自身についての「過去の学習経験」

利用方法: 授業で履修生同士の議論のテーマとして利用し、なぜある教え方は良かったのか、また良くなかったのか、その根拠を分析しながら、振り返る。

利用場面②

教職科目における模擬授業後

利用箇所:振り返りのための授業力自己評価記述文の「授業計画」と「授業実践」

利用方法:模擬授業後、履修生同士で Can-do 記述文の分析を行ったり、実践を支える理論について議論をする。

利用場面③

教育実習中

利用箇所:振り返りのための授業力自己評価記述文の「授業計画」

利用方法:教壇実習前に、Can-do 記述文を参考に、授業のねらいや目的を設定する。

利用場面④

教育実習中

利用箇所:振り返りのための授業力自己評価記述文の「授業実践」

利用方法:教壇実習後、Can-do 記述文を基に、履修生が指導教員と授業を振り返る。

利用場面⑤

教職課程履修開始から終了時

利用箇所:学習・実践記録表

利用方法:履修生の成長を示す証拠資料の一部として利用する。

利用場面⑥

教職課程履修開始から終了時

利用箇所:振り返りのための授業力自己評価記述文

利用方法:振り返りのための授業力自己評価記述文により、履修生の英語授業力に対する認識を確認することで、大学の英語教職課程プログラムの利点と問題点を明らかにする。

上記以外にも、「制度化」の具体的な方略があるので、付録を参照して下さい。

1.3 各セクションの基本的な使い方

「自分自身について」

本ポートフォリオを受け取ってから教育実習前までに、それまでの英語学

習経験，教職 課程や教育実習に対する期待や不安を書きます。また，英語教師として大切な資質能力について考えます。

「授業力自己評価記述文(Can-do 形式による)」

記述文を使って，自己の教職課程での学習や実習での教育実践を振り返ります。

自己評価記述文は全 7 分野(I 教育環境，II 教授法，III 教授資料の入手先，IV 授業 計画，V 授業実践，VI 自立学習，VII 評価)，計 96 記述文(初任者対象の 31 記述文は 現職英語教師編と重複)で構成されています。教職課程における振り返りは，少なくとも実習終了後の事後 指導までに 3 回行います。振り返る時期は，例えばポートフォリオを受け取った時，教育実習前(例:3 年次の学年末)，教育実習後(例:4 年次の秋)です。

実習後の活用方法として，教職課程の終了まで，あるいは教職に就いてからも授業力を自律的に省察するために活用することができます。

2. J-POSTL の課題

J-POSTL の活用の際して，よく課題として挙げられるのが，以下の 3 点です。

- (1) 記述文が多すぎるので，どのようにはじめるか分からない
- (2) すべての記述文をカバーする必要があるのか
- (3) どの記述文(分野)からはじめるべきか

この 3 点の課題への対応として，以下のような方法があります。

- (1) 記述文が多すぎるので，どのようにはじめるか分からない

J-POSTL の導入例として，次のような取り組みも考えられます。まず，担当教師が教職課程の導入に適した記述文を選び，それが書かれたカードを配布します。次に，英語の授業のビデオを視聴します。視聴後，その授業に関する感想や意見を述べる段階で，J-POSTL の記述文が書かれたカードから，学生自身が，自分の見た授業を分析するのに最も効果的な分野を選びます。このような取り組みから，個別の記述文への理解と活用方法を学ぶことができます。

- (2) すべての記述文をカバーする必要があるのか

最初から，すべての記述文をカバーする必要はありません。J-POSTL は，教職課程での導入から始まって，卒業後の実際の教職を通じて，生涯学習の視点で使用されるべきです。

(3) どの記述文（分野）からはじめるべきか

記述は網羅的にリスト化されていますが、J-POSTL はいわゆるマニュアルではありません。教職課程の担当教師から、「教えられる」のではなく、授業のテーマに沿った記述文（分野）を特定し、学生同士、あるいは担当教師を交えたディスカッションが行われるべきです。

2.1 授業力自己評価の記述文について

J-POSTL の活用において、授業力自己評価の記述文は、基本的に以下の2つの目的があります。

- (1) 特定の授業活動で必要とされる授業力について熟慮し、意見を交換する
- (2) 自分自身の授業力の判定

基本的な流れとして(1)で、様々な授業での学習活動で必要とされる授業力を理解した後、模擬授業や教育実習の経験から、(2)で実際に自分の授業力の伸びを判定することになります。ただし、授業に取り組んだ後、その学習活動において、自分の理解が不足していることに気づくこともあります。そのような時に、特定の分野の記述文を読み返し、検討することで、理解を深めることもあります。

2.2 記述文に沿った省察について

J-POSTL という授業力を自律的に高めることを目的としたポートフォリオにおいて、省察の取り組みはとても重要で、本質的な機能になります。J-POSTL を活用しようとする教職課程の担当者は、各自のコースの環境を考慮して、学生が効果的に授業力の理解と能力を検討できることを目指します。学生が特定の自己評価の記述文を選んで、各自の授業プロジェクトに沿って、その記述文に焦点を当てた省察を行うことは、授業力への深い理解につながります。また、記述文を使った省察は、学生同士、あるいは学生と指導教官との対話の促進にも有効です。

2.3 自己評価について

指導と学習に関係する分野では、その授業力の評価は、指導教官にゆだねることが一般的で、自ら評価する機会はあまり多くはありませんでした。しかし、卒業後の学びを考えると、学生が自律的に授業力の評価を行おうとする態度や能力を育むことは、指導教官の重要な役割となるべきです。それぞれの記述文に付随した能力を測定する尺度を利用して、視覚的にも明確な形

で、自己評価の変化を継続的に記録できます。

能力を測定する尺度について、J-POSTL には 1～5 の数値がありますが、源泉になった EPOSTL では数値はありません。それは、評価尺度の数値はあくまでも各自の省察の目安であり、絶対的なものではないということです。このことは、学生の成長を理解するために、指導教官がこの自己評価の記録を定期的にチェックすべきかという課題にも関連します。指導教官は、学生の授業力の進捗に対して配慮すべきことは言うまでもありませんが、この数値はあくまでも学生の自己省察のための記録であり、それを教職課程の授業での評価に使うことは適切ではありません。そのような目的で使用することは、学生は誠実に自分の授業力の判断ができなくなり、前述した「学生同士、あるいは学生と指導教官との対話の促進」が妨げられるので注意が必要です。

2.4 学習・実践記録

「学習・実践記録」では、J-POSTL 活用してから教育実習終了時、さらにその後の教職課程の期間に、自分の学習・実践の記録について記録します。授業力自己評価記述文について、自分の判断の根拠を記述することで、その判断の適切性を検討する「証拠」を示すことができます。この項目は、将来、自分が教職の仕事の就職活動に使うこともできますが、それは本来の目的ではありません。

2.5 教育実習での活用

「概要」でも触れましたが、J-POSTL は教育実習での活用も、学生の授業力高める上で効果的です。そのメリットとして、以下の2点が考えられます。

- (1) 教職課程の担当教官と実習先の指導教員との協力関係の改善
- (2) 実習前後の学生自身の省察の改善

(1)に関しては、「実習日誌」などの記録はありますが、教職課程の担当教官と実習先の指導教員とは個別に対応しがちで、学生の取り組みについて共通の理解を持つことは難しいのが現状です。その際に、J-POSTL の記述文を利用することで、実習期間に学生がどのような授業力の項目について重点的に取り組むのか、教職課程の担当教官と実習先の指導教員とが共通理解を図ることができます。

(2)に関しては、学生は実習校での授業準備や行事などの補助活動など様々な活動に従事するので、自分の授業力についてきちんと向き合う機会を

逸してしまう可能性があります。その際、J-POSTL の記述文から、その期間内に集中的に取り組む授業の課題を選ぶことで、実習の目的を明確にすることができます。そして、実習終了後、記述文により可視化したテーマについて、自分の実習の内容やその際に気づいたことなどについて、時間をかけて検討することができます。

2.6 実習中の評価

実習期間の評価について、J-POSTL は以下の3つ「評価」に活用することができます。

(1) 学生自身の自己評価

(2) 学生と実習先の指導教員の間で、学生が担当した授業に関しての話し合いの共通基盤

(3) 指導教員による学生の評価

J-POSTL は、学生の自律的な成長を促すという基本的な目的や理念を考えると、(1)(2)に関連する評価が中心となります。(3)は、議論の余地があります。その理由は、このような活用法は、Can-do 記述文が、Can't-do 記述文になることです。このような使い方は、記述文を授業力モデルのチェックリストとして使用することで、学生は「できない」ことに注意が向いてしまうからです。

J-POSTL の 6 段階の活用法

このセクションでは Orlova(2011) が推奨する EPOSTL 活用の 6 段階を日本の文脈に置き換え、J-POSTL を英語科教科教育法などの教職課程の授業でどのように活用できるかに焦点を当てて考えたいと思います。

Orlova(2011)は 2008 年よりチェコ共和国の J.E.Purkyne 大学教職課程で英語教師を目指している学生を対象に EPOSTL を導入し、教職課程履修者が習得すべき教師としての専門知識や技能を高めるための手段として用いています。また使用者からのフィードバックを分析した結果、教職課程履修者の大部分が EPOSTL を語学教師教育において有効なツールであると認識していることがわかったと報告しています。さらに、Can-do 自己評価記述文が教師に必要な専門知識や技能を包括的に示しているため、自分がどの分野の知識や技能をもっと高めるべきかに気づく手助けとなっていると感じていることもわかっています。Orlova はこの結果を受け、教員養成時における EPOSTL の活用段階として次の 6 段階を挙げています(図 1 参照)。このセクションでは文脈を日本の教員養成に置き換え、この 6 段階に基づいて英語科教科教育法などの授業での J-POSTL の活用について説明を試みます。

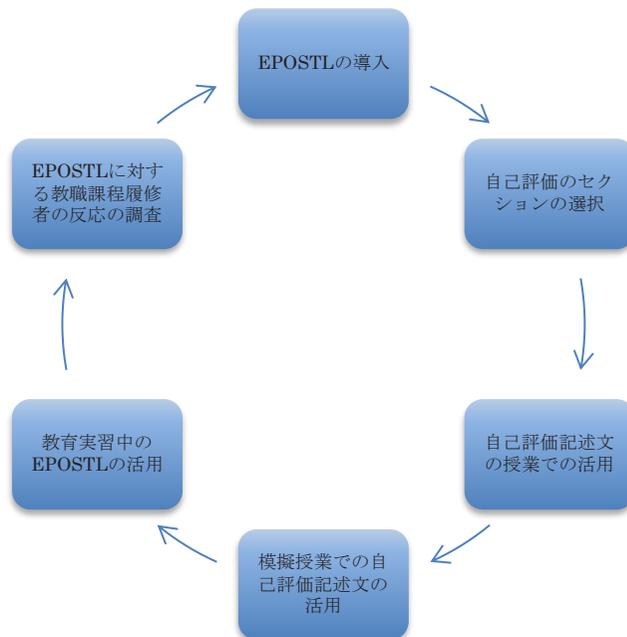


図 1 Orlova(2011)による教員養成での EPOSTL 活用の 6 段階

1. 第1段階 J-POSTL の導入

第1段階は教職課程初期の段階です。教職への興味と J-POSTL への関心を高め、J-POSTL を活用したふり返りの活動にこれから積極的に参加してもらうためには、学期最初の授業などで「言語教師のポートフォリオ」というタイトルそのものが何を意味するかを考える活動が有効です。「ポートフォリオ」という表現が示唆することを考えさせ、これまで自ら外国語学習者あるいは教師として経験してきた内容を思い出させることによって、これから自分がどのような活動を何のために行うのかをより理解することができるでしょう。また J-POSTL の J という文字が示すように、日本の文脈においてこのポートフォリオが使われていることを教職課程履修者にまず理解させましょう。

この段階では Personal Statement (「自分自身について」) のセクションにある質問についてそれぞれの答えをまず記述させ、その後授業などでディスカッションを行った上で自分がどの分野や項目、自己評価記述文により関心を持ち、自分にとってより重要かを考えるきっかけとさせるとよいでしょう。

2. 第2段階 自己評価のセクションの選択

第2段階は英語科教科教育法などの授業内で J-POSTL を実際に使用を始める段階です。J-POSTL の自己評価のセクションには様々な記述文が含まれているので、省察と自己評価の観点をまず絞る必要があります。そのためには授業の内容に関連する自己評価記述文が含まれているセクションを適宜取捨選択するとよいでしょう。たとえば教授法やアプローチについて授業で扱う場合はスピーキング活動、リスニング活動、文法指導、語彙指導などに関する自己評価記述文が含まれている「II 教授法」に焦点を当てて使用することができます。また、授業の組み立てや教案の使用について授業で扱う場合は「IV 授業計画」「V 授業実践」などのセクションがよいでしょう。

3. 第3段階 自己評価記述文の授業での活用

第3段階は英語科教科教育法などの授業内で J-POSTL の使用を深める段階です。この段階では自己評価記述文が教職課程履修者にとって意味のあるものとなることが重要です。まず、個々の自己評価記述文の理解を深めるためにはある程度基礎的な専門知識が必要です。理論や知識の理解と記述文の理解のどちらを先に行うかは対象となる教職課程履修者や授業によって異なりますが、ここでは Orlova(2011)の事例報告に基づき、並行して行う方法

について以下簡単に説明します。

授業ではその時のテーマに関連させて読む課題やディスカッション、録画授業の視聴などをあわせて行くと、選択した自己評価セクションの内容理解の手助けとなるでしょう。また一つのテーマについて導入時と途中、そして最後にそれぞれ自分がテーマをどの程度理解しているかについて振り返る時間を持たせるとよいでしょう。たとえば語彙指導に関するセクション中の次の自己評価記述文が語彙指導をテーマとして導入した最初の段階では具体的にわかりづらいと感じている教職課程履修者がいると仮定してみましょう。

文脈の中で語彙を学習させ、定着させるための活動を設定できる。
[II-F-1] (J-POSTL, p.34)

語彙指導をテーマとした授業の最終段階で、この記述文について他の教職課程履修者と協同して再度振り返ることによって、語彙指導のための言語活動には具体的にどのようなものがあるか自分の理解を確かめ、語彙学習のための活動と語彙定着のための活動の違いについて理解を深めることができるでしょう。また、協同で記述文について考えることにより、時には記述文を拡大解釈する必要性に気づくこともあります。語彙指導に必要な能力は他の能力や技能も含むからです。たとえば、上記の記述文に関連して「新出語彙の意味を提示する様々な方法を使える」「新出語彙を説明するための文脈を考えられる」などの能力も必要となります。一方、この段階では、実際に教室で教えたことがないため本当にできるかどうか自己評価するのが難しいという反応が教職課程履修者の間に見られる場合もあります。その際は「…ことができる」ではなく「…する方法を知っている/…する準備ができていいる」などの表現に変更して振り返らせるとよいでしょう。

4. 第 4 段階 模擬授業での自己評価記述文の活用

第 4 段階は模擬授業を行う段階です。教職課程履修者には教案使用や学習者へのフィードバック、授業運営、コミュニケーションな言語活動の導入など様々な資質や能力を身につけることが求められます。それらの技能やテクニックを積極的に試し、その実践を振り返って考える機会や環境を与えるために、教科教育法などの授業では模擬授業を行うことがよくあります。

教師としての長所・短所を知るためには、理想的には実際の教室で他の教職課程履修者が観察する中で生徒を対象に模擬授業を行うことが望ましいのですが、大学の授業で模擬授業を行う場合、他の教職課程履修者が生徒役となるため、その効果は残念ながら半減してしまいます。この問題を解決する

1つの方法として、模擬授業の録画と視聴を通して実践や経験をふり返ることが効果的です。また Orlova(2011)は教職課程履修者がお互いを教えるという活動を行っています。これはあるレベルにある学習者グループを想定した授業を行うのではなく、生徒役の学生の実際の年齢やレベルに合わせた授業を行うというタスクです。このお互いを教える活動でも次のように自己評価記述文を使うことが可能です。まず模擬授業では自分がどのスキルに焦点を当てたいか、記述文を使いながら考えさせます。その際に次のようなりストを使用するとよいでしょう。

1. 「II 教授法」のセクションのどの分野に焦点を当てたいか選択する。
2. 自己評価記述文をよく読み、選んだ分野のどのスキルを特に練習した
いか考える。
3. 選んだ記述文が自分の練習したいスキルとうまく合っていない場合は、
記述文を拡大解釈し、その自分の解釈を書き留めておく。
4. クラスメイトに教える活動の目的を考え、書き留める。クラスメイト
の言語レベルやコミュニケーション能力を考えて適切な教材や指導過
程を考える。
5. 考えた指導過程をもとに授業を行う（録画する）。
6. 模擬授業の主な焦点は何だったか、クラスメイトに自己評価記述文を
参照しながら考えてもらう。彼らの考えと自分で最初に書き留めてお
いた焦点とを比較する。
7. 家で録画した自分の模擬授業を見る。1人で見てもよいし、誰かと見
てもよい。模擬授業で上手にできた部分とそうでなかった部分を考え、
また自分の考えと他の人からのコメントを比較する。
8. 教師教育者と一緒に録画した授業を見て、自分の授業をふり返る。授
業のどの部分をなぜ改善したいかを考える。

このような手順を踏むとクラスメイトを教える活動に自己評価記述文をう
まく活用することができるでしょう。自己評価記述文によってどのスキルに
自分が焦点を当てたいのかが明らかになり、また、記述文をふり返り、自分
の授業を自己評価することが授業改善につながります。記述文は後でディス
カッションを行う際の枠組みにもなり、授業で学習した理論・知識と模擬授
業での実践を結びつける際に役立つといえるでしょう。

5. 第5段階 教育実習中の J-POSTL の活用

授業だけではなく教育実習中にも目標を立てたり授業改善をしたりする際

に自己評価記述文を使わせるとよいでしょう。同時に、実習中の教師としての成長の証拠としてドシエ（関係資料集）を作らせ、授業の録画や教案、学習者の作品、メンターのコメントなどの資料を取捨選択して記録・保存させるとよいでしょう。教育実習後には実習についてのふり返りを書かせて提出させ、評価の一部とすることもできます。Orlova(2011)は教育実習生の実習後のふり返りを分析し、実習前と比較して授業実践についての考えに変化が見られると述べています。たとえば実習前には自分の感情や問題点に焦点を当て、印象的な感想を書く傾向がありますが、実習後には自己評価記述文と関連付けて自分の能力について分析して書くようになっていきます。

J-POSTL の活用は教育実習生が実習中に自分を建設的にふり返って評価する手助けとなります。何を目標とし、どの自己評価記述文に焦点を当てるかについて自分で選択するため、自分をより肯定的に観察できるようになり、またどのスキルを改善する必要があるのか理解できるようになります。つまり教育実習中にも J-POSTL がふり返りと自己評価のツールとして役に立つということです。

6. 第6段階 J-POSTL に対する教職課程履修者の反応の調査

Orlova(2010)は教職課程履修者から得たフィードバックの分析を通して、彼らが EPOSTL は教師に必要な専門知識を養うのに役立つツールだと認識していると述べています。分析結果によると、EPOSTL は以下の目的を担っていることがわかっています。

1. 教師に必要な資質能力と専門知識についてふり返ることを促す
2. 様々な教室環境における教師という職業への準備を促す
3. 教師としての能力についての自己評価を容易にする
4. 教師としての成長を管理するツールとなる
5. 学生同士、あるいは学生と教師教育者の間のコミュニケーションを促す

この例が示すように、J-POSTL 活用の第6段階として、学期末、年度末などの時期に教職課程履修者を対象に授業における J-POSTL 活用と自己評価について定期的にフィードバックを得るべきです。フィードバックを得ることにより、教職課程における授業でどのように J-POSTL を活用するとよいのか、教師教育者もふり返って考えることができるからです。また、J-POSTL は EPOSTL と同様に体系的かつ継続的に使用することが効果的であり、そのためにも教職課程の教科教育に関する様々な授業で共有して使用するとよいでしょう。

EPOSTL の活用事例から J-POSTL への示唆

1. ウィーン大学英語教育センターにおける教員養成プログラムと EPOSTL の活用

ウィーン大学の英語学科にある英語教育センター（Centre for English Language Teaching: CELT）では、オーストリアの中学・高等学校の英語教員を目指す 1,900 名の教職履修生（以下、履修生）の教員養成を行っています。教職課程は 9 学期で、カリキュラムは「言語学」と「応用言語学」、「英語圏の文化と文学」、「英語教育」、「外国語としての英語教授法」（以下、英語教授法）、2 回の教育実習で構成されています。

英語教授法のプログラムでは、理論と実践の融合を重視するとともに、教師の専門性向上のために重要な認知活動として省察に焦点を置いています。デューイ（Dewey, 1910）の省察の考え方を土台とし、履修生たちは、教師として自律し、継続して自身の教え方を批判的に評価する省察的教師になることが促されています。英語教授法のプログラムは第 3 学期から始まり、2 つの入門授業で構成されています。これらの授業の目的は、英語教授法の基礎を学ぶことであり、4 技能の指導、英語教師と学習者の役割、授業運営、授業計画、コミュニケーション指導法、ピアティーチングとマイクロティーチングなどが含まれています。

上記の授業は、第 5 学期に行われる第 2 回教育実習の必要要件となっており、教育実習では、履修生は熟練教師の授業を観察します。また、授業計画の際、メンターから授業計画の支援や授業の活動のフィードバックを得ます。教育実習と同時期に、履修生は、大学において、熟練教師でもある英語教授法の授業担当教員によるチュートリアルを受けます。教育実習後は、3 つの教授法の授業を履修し、ESP, CLIL, 評価, テストと教育スタンダード, 4 技能の指導, 英語授業における文学と文化などの内容を学びます。最後に履修する授業では、英語教授法の近年の傾向を概観し、様々な教授法についての批判的分析を行います。

EPOSTL が 2007 年に刊行されてすぐに、CELT の英語教授法のプログラムに導入されました。EPOSTL では、最初に（EPOSTL, p.6）到達すべき能力の全容が明示されています。また、「自分自身について」のセクションでは、履修生が履修している教職課程と英語教師としての将来の役割についての省察を支援しています。したがって、EPOSTL は、省察を重視する CELT のプログラムに適合していると考えられました。EPOSTL は、第 3 学期の教授法

の入門授業と第5学期の教育実習と同時期に行われる大学でのチュートリアルで活用されています。

本章では、Mehlmauer-Larcher (2011) によって示されたウイーン大学での EPOSTL の活用事例から得られる示唆に基づき、日本の文脈を考慮した上で、日本の大学教職課程における J-POSTL の活用について述べます。

2. 英語科教職課程における J-POSTL 活用の基本的考え方

各大学の教職課程は、大学によって、カリキュラムが異なり、それぞれの授業で扱う内容も多様です。既存のカリキュラムにおいて、省察を促すツールとして、J-POSTL を補助教材として使用できる場面を柔軟に考えるとよいでしょう。できれば、講義科目から教育実習まで、2~3年にわたって、長期的に一貫して J-POSTL を活用することが望ましいでしょう。同僚と協働して、組織的かつ体系的に J-POSTL を活用できれば理想的ですが、必ずしもこのことは可能ではありません。J-POSTL の意義に理解を得られない場合もあるので、まずは、授業担当者一人であっても活用できるところから導入し、学生のフィードバックを得てから、その意義を同僚に少しずつ伝えていくことも考えられます。

J-POSTL の自己評価記述文は多岐に渡りますが、全てを使用する必要はありません。自己評価記述文は単なるチェックリストではなく、基盤となる理論的背景知識を示したものです。教職課程の最初の授業で、J-POSTL を配布し、p.4 に記載されている自己評価記述文の図を確認しておくことは、教職課程で身につけたい英語授業力の構成要素の全体像を示す意義があるでしょう。しかしながら、活用の際には、授業者または履修者自身が少数の自己評価記述文を選択して、取り組むことで省察が促されます。

履修生が J-POSTL を初めて見た時、自己評価記述文の多さから、必要とされる英語授業力に圧倒されるかもしれません。しかしながら、教職課程の初期段階では、自己評価記述文のうち、少数の基本的な能力しか獲得できないことは当たり前のことであり、心配しなくてよいことを履修生に伝えることが大切です。また、J-POSTL 自体は、成績評価に結びつけるべきものではないことを指導者自身が認識し、履修生にも明示することが求められます。

3. 英語科教育法の授業における J-POSTL の導入

省察を促すために、教職課程の早い段階で J-POSTL を導入します。英語科教育法などの講義科目では教科書が指定されていることが多いため、J-POSTL は補助教材として使用するとよいでしょう。最初は、「自分自身について」のセクションを個人で記入し、ペアやクラス全体で共有する活動か

ら始めることが考えられます。2回目以降の授業では、最初は基本的な自己評価記述文を1～2だけ取り上げ、自己評価記述文の意味や意義を把握した上で、少数の記述文を扱っていくとよいでしょう。その際、最初は個人での省察を記述し、ペア及びクラス全体で口頭で省察内容を共有した上で、最後には個人に戻ることに留意します。省察を言語化し、他者の視点を得ることで、履修者一人ひとりが、省察を深めるとともに、長期的な視点で進捗を実感し、自身の強みと弱みを把握することができます。授業の指定教科書で扱う話題について、自己評価記述文との関連を常に意識すると良いでしょう。自己評価記述文の下支えとなるものが、教授法等の理論であり、教授法に関する知識も重要です。自己評価記述文を用いることで、理論と実践の融合を促進することができます。

模擬授業では、各自の自己評価を支援するために少数の記述文を選択し、個人で省察した後、生徒の役割をした「クリティカルフレンド (Critical friend)」からフィードバックをもらうことで、自己評価の根拠を明確にすることができます。相互評価として、他者からのフィードバックを得るだけでなく、フィードバック後にフィードバックで得た内容をリフレクションペーパーとして、言語化する(書くこと)で、自己評価が深まります。また、後からリフレクションペーパーを見返すことで、自身の成長をメタ認知することができます。以下に活用方法を具体的に示します。

①初回の授業

- ・ J-POSTL を導入し、その内容と機能を説明後、「自分自身について」を各自記入します。
- ・ 「自分自身について」の記述をグループで共有後、各グループの代表が全体に発表します。
- ・ 自己評価記述文の判断の根拠を示したり、授業力の向上を確認するために「学習・実践記録(ドシエ)」を定期的に記入することを履修生に伝えます。
- ・ J-POSTL の記述は、評価には使用しないことと、教職課程の初期段階では、多数の自己評価記述文のうち、いくつかのとても基本的な能力のみを獲得することが、一般的であり、問題ないことを履修生に伝えます。

②2回目以降の授業

- ・ 授業運営、語彙指導など授業で扱う話題を、関連する自己評価記述文と結び付けます。その上で、基盤となる理論的背景知識を提示し、1～2の記述文を選択し、教室の文脈で、具体的にどのような活動を行うべきか

話し合います。

- ・話し合った内容について、各自が振り返りのレポートを書くこともできます。

③模擬授業の回の授業

- ・理論を踏まえ、模擬授業を行う回の授業では、教師として模擬授業で初めて教えた経験の振り返りを各自が記述します。この際、いくつかの自己評価記述文を選択し（例：リスニングの 34,35,37）、能力の自己評価の手助けとします。
- ・模擬授業で生徒の役割をした、いわゆる「クリティカルフレンド」と自己評価の結果を話し合い、自己評価記述文で示された能力が伸長したと思う理由を述べます。同じペアで役割を交代します。
- ・次に、ピアフィードバックに基づき、模擬授業のリフレクションを記述します。
- ・模擬授業実施前に模擬授業案を持ち寄り、履修生同士でコメントを記述して、授業案の改善について話し合うこともできます。

④最後の授業

- ・履修生は、これまでの授業で取り組んできた J-POSTL の自己評価記述文と学習・実践記録（ドシエ）のコピーを提出します。
- ・履修生に J-POSTL の活用経験について、質問紙調査などによりフィードバックを得ます。

4. 教育実習段階における J-POSTL の活用

教育実習段階では、教育実習前、教育実習中、教育実習後の 3 つの時期を考慮しながら、J-POSTL を活用することができます。理想的には、教職課程担当者と実習担当教員が連携して、自己評価記述文を活用し、履修生の英語教授力を支える知識と技術の省察を促すとよいでしょう。J-POSTL は履修者の動機づけのために使うことが重要で、実習中の進捗を振り返り、将来の教師としての成長のために授業案を改善するための支援のツールとなります。

ウイーン大学の教職課程担当者たちは、試行錯誤しながら EPOSTL の使用方法を改善してきました。本プログラムでは、教育実習中の活用が課題でしたが、学校現場での J-POSTL の使用は日本でも課題となると思われます。実習担当教師向けのワークショップを開催し、J-POSTL の意義と活用方法について示したり、履修生と学校の実習担当教員が、授業の前後に J-POSTL

を使用するためのタスクを工夫することが必要です。

①実習前

活用例 1：観察実習のための準備

- ・ 実習前に、履修生は、「J-POSTL の自己評価記述文の脱構築」と呼ばれる活動を行います。この活動では、一つの自己評価記述文を選択して分析します。例えば、「授業実践」分野の「学習者の関心を引き付ける方法で授業を開始できる」という自己評価記述文を選択した場合、授業を開始することと学習者の関心を引き付ける方法で行うことの意味を分析します。また、授業の最初から学習者の関心を引き付けることの妥当性と、残りの授業時間中、学習者が活動的に授業に関わることの重要性の理由を他の履修者と話し合います。
- ・ 次に、小グループで、別の自己評価記述文を選択し、同様に分析を行った後、記述文に対する授業観察の基準を設定します。
- ・ 観察実習におけるタスクの準備のために、各グループで設定した観察基準をクラス全体で共有します。観察基準を設定することで、実習における授業観察の視点を明確にできます。

活用例 2：授業計画

- ・ 各自が担当授業を想定して、実習内容に関連した J-POSTL の自己評価記述文の参照をしながら、実習のために準備した授業案を持ち寄ります。
- ・ 授業案はフィードバックシートとともに、教室内に掲示します。履修生は歩き回って授業案を読み、シートにコメントを記入します。記入後、自分の授業案に対するコメントを読み、小グループでコメントや授業案の改善について話し合います。
- ・ 上記の活動後、グループで 4 技能と言語体系の指導に関連する 1 つか 2 つの自己評価記述文を選択する。教職課程担当者との実習前指導の次のセッションの課題として、英語科教育法の授業で使用した教科書で関連した章を読み、自己評価記述文の基盤となる理論的背景知識を復習します。

活用例 3：理論と実践の融合

- ・ 履修生は教職課程担当者と共に、理論的背景知識と実際の教授を融合します。例えば、リーディング指導の場合、まず、教科書に記載されているプリ・リーディング、ホワイル・リーディング、ポスト・リーディング活動の機能と目的について話し合います。

- ・ 上記の活動と J-POSTL の「リーディング」のセクションの自己評価記述文（特に、記述文 2,5,7）との関係について話し合ったり分析したりします。
- ・ 次に、プリ・リーディング、ホワイル・リーディング、ポスト・リーディング活動の例を挙げ、分析するとともに、様々なテキストや対象者への適切さについて話し合います。これら一連の活動は、読書課題として、履修生が活用例 2 の活動の最後に選択した様々なトピックに応用することができます。
- ・ 次の段階では、J-POSTL の自己評価記述文を CEFR の自己評価記述文に関連づけます。例えば、J-POSTL の「学習者のニーズ、興味・関心、到達度に応じた教材を選択できる」という記述文を、CEFR の能力レベル A, B, C の「リーディングのスキルと指示」を示す記述文と比較します。
- ・ 最後に、リーディング教材の様々な例を見て、グループで、CEFR にしたがって、これらの教材が示す学習者の能力レベルを規定します。

②実習中

活用例：実習担当教員との話し合い

- ・ 履修者が実習中に実習担当教員に申し出て、選択した少数の自己評価記述文を補助的に用いながら、授業前後に、授業案、授業実践、教材について話し合いをし、改善点を考えます。

③実習後

活用例：教職課程担当者との省察的話し合い

- ・ 履修生は、教職課程担当者との個別の話し合いに、これまで使った授業案、教材、J-POSTL を持参します。省察的話し合いの目的は、実習段階の体験について、また、授業案、授業実践、教材、将来の実践のために改善できることについて話すことです。J-POSTL の自己評価記述文を用いながら、履修生は実習中に認識した自身の強みと弱みを評価します。

実践編

教職課程における履修段階に応じた J-POSTL の活用

吉住香織（神田外語大学）

1. はじめに

将来中学または高校の英語科教員を目指す教職課程の履修生にとって、自らの授業や取り組みに対する内省的な振り返りや自己評価は、自身の授業力や学びの質を向上させ、履修生が自律的に成長する上で大きな役割を果たす（吉住, 2017）。

「J-POSTL 教職課程編」（JACET 教育問題研究会, 2014 = 以後 J-POSTL と略す）は履修生に成長と自律を促すことを目的とする省察ツールである。中でも Can-do 形式で示された自己評価記述文（以後 SAD と略す）は、教職履修生に教師として目標とすべき授業力を捉える確かな視点と機会を提供する（高木, 2015）。だが、教育環境から評価まで SAD が扱う分野は広く内容も多岐にわたる。抽象度がかかなり高い内容の SAD もある。学ぶ側に英語授業指導に必要な基本的な知識や経験が十分でない、SAD の項目数の多さに圧倒されたり、単なるチェックリストとして使用される可能性もある。J-POSTL を、成長し行動する内省的な教師の育成という本来の目的を実現する省察ツールとして英語科教育法の授業で活用するには、このような使用上の課題（久村, 2016）に留意した J-POSTL の適切な指導と活用が求められている。

本セクションでは、筆者が教職課程で取り組んできた履修段階に応じた J-POSTL の活用を提案したい。これは、教職課程における授業内容や履修生の学習状況に合わせて段階的に J-POSTL を活用した省察を通して、履修生の学びと成長を目指すものであり、EPOSTL 活用の「6 つの段階」（Orlova, 2010: p.28）との共通点も多い。具体的には、まず授業の狙いや指導内容に応じて関連する適切な J-POSTL の分野や SAD を検討し、適切な項目を選ぶ。次に選んだ SAD や項目を英語科教育法の授業指導計画に組み込み、協働と学び合いの中で、段階的に履修生の内省的な振り返りと自己評価を促していく。J-POSTL を活用したこのようなプロセスを経ることで、省察を通じた履修生の学びにつながる自律的な振り返りと成長を支援できるのではないかと筆者は考えている。本稿では、教職課程の履修生の成長と学びの質の向上を目指して筆者が取り組んできた、省察ツール J-POSTL を活用した英語科教育法授業の 3 つの実践について報告したい。

2. 実践の背景

本稿で J-POSTL を活用した授業実践の対象となったのは、2017 年 4 月から 2018 年 1 月までの期間に半期ずつ開講された英語科教育法の 3 つの授業である。具体的には、必修科目である「英語科教育法 I」（前期・2 単位、以後「英教法 I」と略）、「英語科教育法 II」（後期・2 単位、以後「英教法 II」と略）、及び選択科目の「英語科教育法 III」（前期・2 単位、以後「英教法 III」と略）で、それぞれ筆者が授業を担当した。

「英教法 I」と「英教法 II」は中学・高等学校の英語科教員免許状の取得を希望する教職課程に学ぶ履修生の中で、主に高等学校の英語教員を目指す学生を対象とする必修科目で、受講生の大半は 3 年生である。前期・後期に分かれてはいるが、「英教法 II」は「英語科教育法 I」を修得した者のみが受講できる科目であり、原則として前・後期、同じ履修生を対象とし通年履修を前提とする。授業では、主に高等学校の英語教師に求められる基本的な授業力・指導力の向上を目指し、履修生は英語授業指導に必要な専門的知識や技能を習得し、それらを模擬授業や演習等の体験を通して身に付けていく。前期「英教法 I」、後期「英教法 II」で各 1 回ずつ、履修生が単独で行う模擬授業（=Micro teaching 以降 MT と略）は、学習した理論や知識を実践と結びつける上で重要な機会となる。回数の限られた MT を最大限活かし、履修生の授業力向上を図るために、前期、後期の MT には連続性のある到達目標を設定し、前期から後期へと段階的に学びを深めることができるよう授業内容を工夫し、学びのプロセスを重視している。さらに到達目標を踏まえながら、省察ツール J-POSTL の活用を年間計画に段階的に組み込むことで、前期の振り返りを後期に活かし、授業改善に向けた彼らの主体的な取り組みに繋がる指導を目指した。本稿では、主に MT 指導で関連する J-POSTL の「自己評価記述文（=SAD）」を履修生の振り返りと自己評価に活用した教職課程「英教法 I」と「英教法 II」における実践と取り組みについて報告する。

選択科目である「英教法 III」は、教育実習を控えた主に 4 年生を対象に開講している授業である。履修生全員、筆者が初めて授業を担当した学生だが、履修条件である「英教法 I」と「英教法 II」の修得は前年度の段階で終えている。本授業は、教職課程の総仕上げの場である教育実習を柱としている。これまでに習得した理論や知識、指導技術を教育実習での実践に結びつけることが出来るように、現場の状況をふまえた履修生の授業実践力や見識の向上と共に、卒業後、彼らが自律した英語教師としての第一歩を踏み出せるような支援を目指している。したがって教育実習準備段階から 3～4 週間

の教育実習期間中、さらに実習後まで、実習先の状況を踏まえて履修生自身が選んだ J-POSTL の SAD を用いることで、実習内容についての自己評価と省察を促し、教育実習先での授業実践は勿論、実習からの学びをより深め、豊かなものにするのを重視した。本稿で報告するのは、教育実習からの学びを履修生の内省と成長に繋げることを目指した J-POSTL の活用の取り組みについての実践事例である。

3. 「英語科教育法」における履修段階に応じた J-POSTL の活用実践例

J-POSTL を授業でより効果的に活用するためには、取り上げる内容や利用方法を、履修内容や履修生の学習段階に応じて工夫する必要がある。EPOSTL 活用の「6つの段階」(Orlova, 2010 : p28) を参考に、準備から授業最後の振り返りまで、筆者は履修段階に応じた 5 段階の J-POSTL 活用サイクル(図 1 参照)を考え、それに基づいて授業を行っている。本節では、筆者が担当する英語科教育法の授業で取り組んだ J-POSTL の 3 つの活用実践例について報告したい。実践例 1 は、担当した全ての授業で共通に行っている J-POSTL の導入を兼ねた取り組み、実践例 2 は、必修科目である「英語科教育法 I (=英教法 I)」と「英語科教育法 II (=英教法 II)」で行っている模擬授業への「自己評価記述文 (=SAD)」の活用、実践例 3 は、選択科目「英語科教育法 III (=英教法 III)」の履修生を対象とする教育実習への SAD の活用である。

3.1 実践例 1 :J-POSTL の導入と「自分自身について」の利用

➡ J-POSTL 活用サイクル(図 1)の第 2 及び第 5 段階

J-POSTL の導入を兼ねて、J-POSTL の「自分自身について」の頁を用いて、「英教法 I」から「英教法 III」まで、担当している英語教職課程の履修生全員を対象に共通に実施した取り組みである。年度末の総括時にフォローアップ活動として再度同じ頁を利用することで、履修生は自分の学びと成長を自覚し、省察を深めることができる。

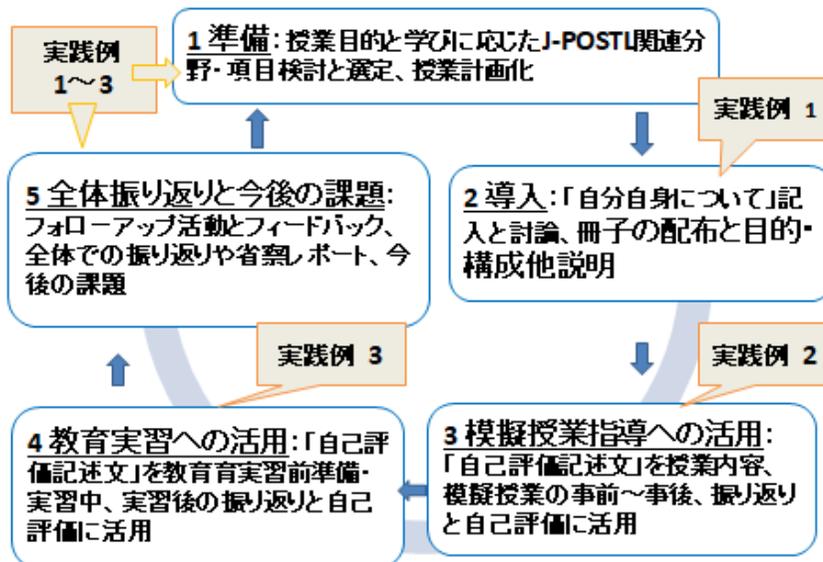


図 1. 英語科教育法における履修段階に応じた「J-POSTL の活用サイクル」

■利用時期

年度当初（4月第1回，第2回の授業），及び年度または学年最後の授業

■利用箇所：「自分自身について」

■実践の概要

J-POSTL をいつ、どのような形で導入するか、タイミングは重要である。授業指導に必要な基本的知識や実践的経験が履修生に乏しい場合、書かれている自己評価記述文（=SAD）の内容を具体的にイメージできないことが多く、必要以上に難しい印象を受ける場合もある。授業指導計画を立案する際、その導入には十分な配慮が求められる。筆者は「自分自身について」の記入から J-POSTL を使い始めるようにしている。予備知識の有無と関係なく、全ての履修生が取り組むことが出来るからである。実際この活動から始めることで、その後 J-POSTL 本誌を配布する際も、目的や構成等についてスムーズな導入が可能になる。また年度末に、最終レポートや意見交換の形で、「自分自身について」の中でも特に「教師の資質・能力」について再度考えさせる機会を設けている。同じ頁を年度の最初と最後に2回利用することで、履修生は自らの学びと成長を自覚し、省察を深めることができる。指導は以下の手順と内容で行った。

①「自分自身について」を記述式アンケート課題とする[初回授業]

J-POSTL の「自分自身について」の内容は、筆者が毎年 4 月最初の教職課程の授業で行ってきた教員志望動機や英語学習体験に関するアンケート（選択式＋記述式）の記述式のアンケート紙調査とほぼ同じ内容であった。そこで、筆者が一部加筆した「自分自身について」を記述式アンケートとし、その回答を次の授業までの提出課題とした。加筆したのは、回答方法に関する指示で、「過去の英語学習経験」について回答する際、漠然とした印象を語る記述に終わらせないように、また課題提出時に行う履修生同士の話し合いにも役立つように、よい／よくないと考えた理由をキーワード化して示すように指示した。履修生は 1 週間後に回答を提出した。

②「自分自身について」の記述回答の共有と意見交換 [第 2 回授業]

第 2 回の授業で、特に「過去の英語学習体験」の「よかった授業」と「教師の資質能力」に対する各自の記述アンケートの回答について、グループ内、及び全体での共有を図った。まずグループ討論で、共通項目や相違点について意見交換を行った後、キーワードをまとめてフリップに書いて示す形式でグループ毎に意見交換した。続いてグループ単位でキーワード・フリップにまとめ、話し合った内容を全体に発表させた。話し合いを通して履修生は、専門性や人間性、社会性など、英語教師に求められる様々な資質があることに気づく。また共通点・相違点を共有するプロセスの中で、教師志望という共通の目標をもつ他の履修生（＝仲間）と出会い、協同で活動に取り組む最初のステップを経験することになる。

③年度末の振り返りで「自分自身について」を再度利用 [最終回授業]

年度最後に、自分が目指す教師像や英語授業指導のあり方を再度、最終レポートや話し合いのテーマとして取り上げた。履修生は年度当初に記述した「自分自身について」の記入内容を見直した上でレポートを書く、あるいは意見を述べることを求められる。教師に必要な資質・能力やよい授業について、J-POSTL を活用した授業での学びを通して新たな視点や観点を加える学生が多い。年度当初と同じテーマを再度とりあげることで、履修生が自分の意識の変容や教職課程での学習成果、さらには自身の成長に結果的に気付くことになる場合も多い。

■指導上の工夫や留意点

「自分自身について」への記述は、自分がどんな授業や教師をよいと思っているのか、英語の授業や教師の資質・能力に対する自身の教師ビリーフ（波多野, 2010）に、履修生が気付く機会にもなる。単に「楽しい授業」というような漠然とした印象を述べる回答で終わらせないためには、どのように、あるいはなぜ楽しいのか、という様に、自分の考えの根拠を具体的に言語化

させる必要がある。その点、キーワード化は効果的である。具体的には、キーワードを示しながら回答に対する理由を記述するよう指示している。簡単な方法ではあるが、自分はどのように英語授業を捉えているか、自身の考えやビリーフを履修生自身がより明示的に示すことができる上、共有や話し合いもスムーズに進む。なお、年度の早い段階の討論には特に授業担当者の配慮が大切である。実際に受けた授業指導や学習経験が履修生の教員志望動機となっている場合も少なくない。授業担当者は履修生の回答に対する価値判断を加えないよう注意したい。また自由に発言できる雰囲気作りに気を配り、グループ討論が円滑に進むための助言も、時には必要であろう。討論は、共に教師を目指す履修生が互いの共通点や相違点から学び合う協同体験として、大事にしたい。

3.2 実践例 2 模擬授業に関連する「自己評価記述文」の選択活用



J-POSTL 活用サイクル (図 1.) の第 1, 第 3, 及び第 5 段階

必修科目である「英教法 I」と「英教法 II」で前・後期各 1 回ずつ実施した模擬授業及びその指導に、関連する J-POSTL の自己評価記述文を選択して活用した実践例である。各模擬授業全体の振り返りのためにそれぞれの模擬授業後にフォローアップ指導として行った取り組みと共に紹介したい。

■**利用時期**：前・後期の模擬授業指導期間中（5 月～6 月，9 月～11 月），及び終了後（6 月，12 月）

■**利用箇所**

「自己評価記述文（＝以降 SAD）」96 の SAD の中から模擬授業と関連する 35 記述文を選択して利用 ※選んだ記述文は「J-POSTL を用いた振り返り項目一覧・記録表」（資料 1.）参照

■**実践の概要**

模擬授業（＝以後 MT）は、疑似的な教室環境の中で、履修生が学んだ知識や技能を実践に結びつけるための重要な機会である。前期・後期各 1 回ずつ実施する MT を履修生の学びと成長に最大限に活かすために、筆者は前・後期を見通して選択した SAD を活用して MT 指導の充実を図っている。具体的には、MT の準備段階から実施後まで、繰り返し、かつ計画的に選択 SAD を MT 振り返りと自己評価に活用させることで、MT からの学びや気づきの可視化を履修生に促すと共に、授業改善に向けた主体的な行動に繋がるように工夫している。さらに MT 期間終了後、フォローアップ指導として SAD を用いた全体での振り返り（話し合い）や年度最後にあらためて省察レポートを課すことで、MT からのより深い重層的な学びを引き出し、また今後の

課題の明確化も期待できる。指導手順と内容は以下の通りである。

①MT と関連する SAD の選択 [授業開始前の準備段階]

英語科教育法の授業指導計画検討の際、前期・後期各 MT の狙いをふまえ、準備段階から MT 後の全体の振り返り段階まで、授業担当者が J-POSTL 中で関連する SAD を検討し選択した。

②選択 SAD の提示及び授業指導内容との関連付け [MT 実施前：前期第 3～5 回，10～15 回授業，及び後期第 1～2 回授業]

MT および授業力向上に必要な知識や技能と共に、英語科教育法の授業の中で指導内容と関連する選択 SAD を履修生に提示した。履修生は、提示された選択 SAD を、MT 準備段階にあたる学習指導案の立案やりハーサルなど、各自が準備を進める際の振り返りに利用した。

③履修生自身及び他の履修生が行う MT に対する振り返りツールとしての選択 SAD 利用 [MT 期間中]

前期・後期それぞれの MT 期間中、SAD は履修生が自他の MT を振り返るための視点や観点を提供した。履修生はまず実施直後のフィードバックや振り返りを通して互いの MT から学び合う。その後さらに、自分の行った MT の録画映像を 3 回以上視聴し、他の履修生からのコメント・シートの内容も踏まえて、「J-POSTL を用いた振り返り項目一覧・記録表」（資料 1）を利用して SAD の各項目の自己評価を行い、再度自分の MT を振り返る。振り返りの内容は、自分の MT が終了してから 2 週間後に「MT 振り返りレポート」（資料 2）を用いた記述レポートにまとめ、自己評価数値を記入した「J-POSTL を用いた振り返り項目一覧・記録表」と共に提出する。この表は、前期 MT 終了後の 7 月に一度提出し、さらに後期 MT 終了後 11 月の 2 回に分けて提出させた。なお、前期と後期の「MT 振り返りレポート」内容の違いは、「前期の振り返りや反省を後期に活かすことができたか」という質問を後期のシートに加えた点である。この 2 つの提出課題は前期・後期の各 MT 後に、省察を通じた授業力の推移や向上、今後の課題を履修生が振り返り、また自覚できることを意図したものである。

④フォローアップ指導：SAD を利用した前期・後期 MT 全体の振り返り [MT 終了後：前期第 9 回授業，及び後期第 11 回授業]

前期・後期それぞれの MT 期間が終了した後の授業で、SAD を踏まえながら全体で振り返りを行った。最初にまず授業担当者から MT 全般に対するフィードバックを与えた後、グループ単位で選択 SAD に関する自己評価や自分の解釈、疑問点など意見を出し合った上で、全体でも共有した。出された意見の特徴的な傾向としては、前期 MT の焦点となるオーラル・イントロダクションに関連した内容や生徒の動機づけにつながる指導に関する SAD への

自己評価が高い履修生が多かった一方で、英語での即興的な対応や生徒の英語でのやりとりの促進に関連する SAD 項目に対しては、全般的に自己評価が低かった。また、意見の共有と話し合いを通して自己評価の高低が特に目立った記述文や自分がその評価をつけた理由などに関しては、SAD に対するそれぞれの解釈や問題解決の為の方策などを含めて履修者同士の意見交換を行っていた。授業担当者も適宜話し合いに加わって助言を与えることが出来たので、結果的には後期 MT への授業改善へのヒントに繋がった。また後期 MT 後には、2 つの MT を終えた年間の振り返りを兼ねて J-POSTL を用いた振り返りに対する個々の感想や意見、疑問点などを自由に書いてもらった。時間をかけて振り返りを繰り返すことで、MT を通した互いの成長への気づきだけでなく履修生自身の今後の課題や目標の明確化を促すことが可能になる。さらに履修者間で解釈や意見が大きく異なる SAD や、内容や用語の意味をよく理解出来ていない SAD の存在も明らかになり、授業担当者にとっても、J-POSTL 活用と授業内容を振り返る貴重な機会であった。

■ 指導上の工夫や留意点

SAD への数値の記入は 1~5 の範囲となっているが、それでも 0 以下のマイナス 1 から記入し始めようとする履修生もいる。4 月の段階では SAD の大半の項目の理解が出来ていないことを考えればやむを得ないことであろう。本人が自分のスタートした時点の状況に後で気付くこと自体、振り返りとしては意味がある。但し、4 月ではなく、ある程度学習した後、MT の始まる直前に記入させる、あるいは前期の MT 終了後に、MT 前の 4 月と MT 後の数値を 2 つ同時に記入させる、というのも一案であろう。この段階であれば、SAD の意味する内容について履修生がある程度まで具体的なイメージをもった上で自己評価出来る状態になっている可能性が高いからである。記入の時期については、授業担当者の授業指導の狙いや履修生の学習状況も踏まえて判断したい。また自己評価とは言え、数値で示した評価を較べると、SAD の内容次第では履修者間で数値や受け止め方が大きく異なることがある。全体的な傾向としては、前期と後期 1 回ずつに実施した MT や振り返りを経て自己評価が上昇する履修生が多いが、前期 MT 後は高い評価をつけた項目について後期 MT の後に低い評価をつける学生もいる。自己評価が厳しくなることは必ずしも授業力が低下したことを示すとは限らない。寧ろ SAD や授業に対する理解が深まったが故により厳しく自分を評価する場合もある。「J-POSTL を用いた振り返り項目一覧・記録表」に表れた数値については、履修生は勿論、授業担当者も注意して見ていく必要があるだろう。この点、自己評価表と同時に MT 後に提出させている記述式の「MT 振り返りレポート」は重要な役割を果たす。履修生の授業力に対する意識の変容や成長のプ

ロセスを確認することができるからである。事実、最後に行った全体振り返りの話し合いの場面では、履修生は授業力の向上をより具体的に言語化することが出来るようになっていた。SADの伝える内容を具体的な授業指導場面例を挙げて説明できる履修生まで現れた。このような自身の経験に基づく学生同士の学び合いを大事にしたい。また、話し合いや報告の内容に応じて、授業担当者は適切なフィードバックを与える配慮も必要である。

3.3 J-POSTL 活用実践例 3 教育実習に関連する「自己評価記述文」の活用

➡ J-POSTL 活用サイクル(図1)の第1, 第4及び第5段階

■**利用時期**：4月(=教育実習前), 5月~6月(教育実習中~教育実習後)

■**利用箇所**：「自己評価記述文(以降SAD)」から、特に教育実習と関連する記述文を授業担当者だけでなく、個々の履修生が選択して利用

■**実践の概要**

教育実習は、履修生にとって、学んだ知識や技能を実際に現場の授業指導に活かす教職課程の総仕上げの段階であり、自律した英語教師になるために自分に何が求められているかを経験から学ぶ貴重な機会である。したがって、履修生が実習先の実態に応じた英語授業指導ができるように、教育実習で使用するSADについては、授業担当者が事前に提示した共通の記述文以外、その選択を履修生自身に任せた。実習終了後は、フォローアップとして再度J-POSTLを利用して自分自身の実習を振り返らせた後、授業時にその内容について全体での共有化を図り、互いの実習からの学び合いを促した。なお振り返りや話し合いの際のSAD選択についても、授業担当者が選択した2~3の記述文以外はやはり履修生自身に委ねた。指導の手順と内容は以下の通りである。

①**教育実習に関連するSADの選択と提示 [教育実習前準備及び授業]**

実習中の振り返りに共通して必要であると判断したSADは事前に選択して授業計画と指導内容に組み込んだが、それ以外のSADの選択は履修生に任せ、できる限り各履修生の実習校の状況や授業内容を振り返りや自己評価に反映できるようにした。

②**教育実習中の自他の振り返りツールとしてのSAD利用[実習期間中]**

履修生は、実習先の実情や生徒の実態を踏まえ、また英語授業指導や自他の実習生の授業の振り返りに適宜SADを参照しながら、教育実習の期間中に授業改善に取り組んだ。J-POSTLをどのように活用するか、実習校での履修生指導担当者との情報共有が望ましいが、現実には大変難しい。具体的な方法等も含めて今後の検討課題である。

③フォローアップ指導：SAD を利用した教育実習の振り返りと全体での共有 [実習後の授業]

教育実習後は、大学に提出する振り返りレポートとは別に、J-POSTL や SAD を活用しながら実習についての振り返りレポートをまとめさせた。実習先から戻った後の最初の授業で、レポートに基づいて各実習内容とその振り返りについて全体で共有し話し合う機会を設けた。それによって自らの行った実習内容をより多角的、かつ客観的に捉えることが可能になり、また互いの実習からの学びを深める機会にもなった。

■ 指導上の工夫や留意点

実習先や実習に伴う授業指導内容についての情報の有無は、実習の準備や SAD の選択に大きく影響する。しかし、様々な事情から実習に関する事前情報が直前まで得られない場合もある。不安を抱える実習直前の履修生に対しては、SAD の項目についての自分の自己評価を記入させることで、実習前に自分がまだ出来ていないことやさらに取り組むべき課題への気付きを促すことができる。教職課程の総仕上げとも言うべき教育実習を前に、履修生の漠然とした不安感を授業力向上のための前向きな取り組みに変えるためにも、SAD を利用した振り返りは有用と言えるだろう。一方実習後のフォローアップの実践では、履修生の実習校の状況と経験がかなり異なるため、SAD の解釈や自己評価に対する観点について履修生によって意見が分かれる傾向がしばしば見受けられた。学校や生徒の実態とのギャップへの戸惑いに言及する履修生もいた。最終的には、予定通りにいかない原因を互いに出し合った後、準備不足や自分の指導内容を実情に合う形で柔軟に変えていくことが重要である、という方向に話し合いがまとまっていった。特に答があるわけではないが、教育実習という貴重な機会を再度振り返ることは、履修生が実習でしか学び得ないことに気づき、実習経験からの学びを深める履修生の成長の機会になることを強調したい。授業担当者としては、多様な授業場面を想定した指導法や対応についての研究やきめの細かい指導を行うと共に、適切な助言ができる十分な準備をしておく必要があるだろう。

4. おわりに

J-POSTL や自己評価記述文を履修生にただ提示するだけで、彼らの自律的な省察を促すことは難しい。J-POSTL を省察ツールとして効果的に使用するためにはその導入や利用方法において履修生の振り返りを学びに繋げる為の手順と工夫が必要になる。本稿では、3 つの実践事例に基づいて履修生の学習段階に応じた J-POSTL の利用を提案した。

英語科教育法の授業指導に、履修生の学習段階と学びのプロセスに沿うよ

う指導方法を工夫しながら J-POSTL を利用することで、履修生は授業力に対する学びと省察を徐々に深め、自律的な授業改善への姿勢を身につける。とりわけ自己評価記述文(=SAD)は、指導者が足場掛けをしながら繰り返し計画的に使用し、話し合いや学び合いを通して理解を深めることで、履修生の重層的な学びを引き出すことも可能になる。自分自身の課題と共に、学びと成長を可視化することが、履修生に自主的な取り組みを促す。当初かなり難しい印象をもっていった SAD でも、それがどのように授業力を支えるのか、具体的な例を挙げながら他の履修生に助言ができるほどに成長する履修生さえ現れた。省察を通じた履修生の授業力の向上と成長を示唆するものと言えよう。さらに J-POSTL の使用は、授業担当者である筆者に授業を振り返り今後の課題を自覚させるための貴重な機会を提供した。本実践の対象となった履修生の人数は限られており、汎用性を主張する数値的な裏付けも十分とは言い難い。個々の SAD の理解と共に SAD を選択する際の基準も明らかに出来なかった。これらを課題として、今後も J-POSTL を活用した教職課程授業の充実を目指す取り組みを続けていきたい。本報告が、省察ツール J-POSTL を通して成長する履修生の姿を少しでも伝えることが出来れば幸いである。

最後に履修生が書いたフォローアップレポートから 2 つの記述(吉住, 2018)を引用する。彼らは省察し成長する教師への第一歩を踏み出した、と言ってよいだろう。

「この授業を受講するまでは、自分が英語で授業を行うことができるようになるなんて思ってもいなかったし、この自己評価記述文を読んでも理解出来ないところもあったので、自分が大いに成長したと感ずることができた。」

「J-POSTL によって自己評価をつけてきたので、自分の課題や問題点を明確にみつけることができた。そのため、回を重ねる毎に改善することができた。今後も自己評価を続けて効果的な授業ができるように努めたい。」

引用文献

- 久村研 (2016). 「EPOSTL から J-POSTL へ：日本での適用可能性をめぐって」『言語教師教育』 Vol.3 NO.1 13-35, JACET 教育問題研究会.
- JACET 教育問題研究会 (2014) 『言語教師のポートフォリオ (J-POSTL) 【英語科教職課程編】』 JACET 教育問題研究会.
- 神保尚武他 (2011). 『英語教師の成長：求められる専門性』 大修館書店
- Newby et al. (2007). *European Portfolio for Student Teachers of Languages*. European Centre for Modern Language /Council of Europe.
- OECD (2005). *Teachers Matter*.
- Orlova, N. (2011). Challenges of integrating the EPOSTL into pre-service teacher training. In Newby et al. *Using the EPOSTL*. European Centre for Modern Language /Council of Europe Publishing.
- 高木亜希子 (2015). 「英語科教職履修生による省察～言語教師のポートフォリオ J-POSTL を用いて」『Language Teacher Education 言語教師教育』 Vol2 NO1, 59-77, JACET 教育問題研究会.
- 吉住香織 (2017). 「英語科教育法における模擬授業と学びに関する考察」『教職研究』第 29 号 2017 年 4 月立教大学 学校・社会教育講座 教職課程.
- 吉住香織 (2018). 「教職課程履修生の省察と成長に関する考察：模擬授業指導への『言語教師のポートフォリオ』の活用」『Language Teacher Education 言語教師教育』 Vol.5 NO.1, 27-46, JACET 教育問題研究会.

資料Ⅰ 「2017年度英教(ADE)MT 成長のためのツール『J-POSTL』を用いた振り返り記述文一覧：記録・自己評価表」

1) 分野			2) 自己評価記述文	3) 自己評価： 1～5		
				4月	7月	11月
I 教育 環境	P13	B	2. 学習指導要領と学習者のニーズに基づいて到達目標を考慮できる。			
			3. 学習者が英語を学習する動機を考慮できる。			
			4. 学習者の知的関心を考慮できる。			
			5. 学習者の達成感を考慮できる。			
II 教 授 法	P17	A	1. 学習者をスピーキング活動に積極的に参加させるために、協力的な雰囲気を作り出し、具体的な言語使用場面を設定できる。			
			3. 発表や討論などができる力を育成するための活動を設定できる。			
			4. つなぎ言葉、相槌などを効果的に使って、相手とインタラクションができる力を育成するための活動を設定できる。			
	P20	D	2. 学習者が教材に関心が向くよう、読む前の活動を計画できる。			
			3. 学習者が文章を読む際に、教材のトピックについて持っている関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。			
			7. リーディングとその他のスキルを関連づけるような様々な読んだ後の活動を選択できる。			
P21	F	1. 文脈の中で語彙を学習させ、定着させるための活動を設定できる。				
IV 授 業 計 画	P26	A	1. 学習者のニーズと興味関心を考慮し、学習指導要領に沿った学習目標を設定できる。			
			3. 学習者の意欲を高める目標を設定できる。			
			4. 学習者の能力やニーズに配慮した目標を設定できる。			
	P27	B	1. 「聞くこと」「話す事」「読むこと」「書くこと」の4技能が総合的に取り込まれた指導計画を立案できる。			
4. 目標とする学習活動に必要な時間を把握して、指導計画を立案できる。						

	P28		5. 学習者がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。			
			6. 学習者のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。			
			8. 学習者の反応や意見を、授業計画に反映できる。			
		C	1. 学習目標に沿った授業形式をえらび、指導計画を立案できる。			
			2. 学習者の発表や学習者同士のやりとりを促す活動計画を立案できる。			
			3. 英語を使うタイミングや方法を考慮して、授業計画を立案できる。			
V 授業実践	P30	A	1. 学習者の関心を引きつける方法で授業を開始できる。			
			2. 指導案に基づいて柔軟に授業を行い、授業の進行と共に学習者の興味・関心に対応できる。			
			3. 学習者の集中力を考慮し、授業活動の種類と時間を適切に配分できる。			
			5. 予期できない状況が生じたとき、指導案を調整して対処できる。			
		B	1. 授業内容を学習者の持っている知識や身近な出来事や文化等に関連づけて指導できる。			
	P31	C	1. 授業開始時に、学習者をきちんと席に着かせて授業に注意を向かせる様に指導できる。			
			2. 学習者中心の活動や学習者間のインタラクションを支援できる。			
			3. 可能な範囲で、授業の準備や計画において、学習者の参加を奨励できる。			
	P32	D	1. 個人学習、ペアワーク、グループワーク、クラス全体などの活動形態を提供できる。			
			2. フラッシュカード・図表・絵などの作成や視聴覚教材を活用できる。			
		E	1. 英語を使って授業を展開するが、必要に応じて日本語を効果的に使用できる。			
			2. 学習者が授業活動において英語を使うように設計し指導できる。			
VII	P37	F	1. 学習者の誤りを分析し、建設的にフィードバックできる。			

資料 2 後期「Micro-teaching (=MT) の振り返りレポート」について
(2017 年度使用版より)

*前期同様、自分の MT の録画ビデオを 3 回以上見た上で、当日合評、「J-POSTL(第 5 回資料参照)」、他学生「コメント・シート」内容を踏まえ、各自以下の内容・要領で①「MT の振り返りレポート」を作成し、自己評価を記入した②「J-POSTL 振り返り項目自己評価一覧表」を、③「コメント・シート」、④「授業録画 USB(専用番号と氏名を記入)」と共に期限までに提出して下さい。

◆提出日時：自分の MT 実施から 2 週間後の授業時 ※紙媒体として手元に残すこと

◆書式：A4 版縦・横書き 1 枚(両面)、以下の要領と書式を守り、ワープロで作成する

・後に示した<見本> (※途中省略版) に示す通り、タイトルは一番上、氏名、専用番号等は必ず両面、かつ一番下に記入する

・字数：2,000~2,200 字 ※最後に必ず文字総数を明示する。

・フォント他：書体は自由。サイズは日本語・英語共に、10.5~11pt が目安

◆内容：以下の 1~6 の項目全てについて自分の MT を振り返り、①「MT の振り返りレポート」を作成する。また文字数は、[] 内に示された各項目の文字数の目安にし、レポート全体を 2,000 字前後にまとめる。なお、各項目を見出しとして(番号とゴシック、下線部の部分)書いた上で、自分の考えを述べること。

1. 指導案の狙いと工夫 [200~300 字]:立案時に何を狙いどんな工夫をして MT に臨んだか、について述べる。

2. 他学生からのコメント[400~500 字]: 1) 良かった点、2) 改善点を分けて、指摘されている内容のポイントを箇条書き形式でまとめる。

3. 自分の MT 振り返り[800~1,000 字]: 1, 2 (↑) をふまえ、自分の授業録画ビデオを最低 3 回以上メモを取りながら視聴した上で②に自己評価を記入し、自分の MT の良かった点、および改善すべき点をまとめ、1) 内容 2) 指導技術(板書、説明方法他) 3) その他の 3 観点から振り返る。

4. MT 総括 [40 字程度]: 今回の MT を次の 1) か 2) の形で簡単に述べる。

1) 前期の MT の反省を活かし、{全ての点で/大体は/半分程度は/少しは}自分が狙った通りの授業が出来た。

2) 前期の MT の反省を {余り/全く} 活かせず、狙った授業が {ほとんど/全く} 出来なかった。

5. 総括の根拠[200~300 字]: 上記 4 (↑) と自分が総括する理由又は原因

6. 今後の課題[400~500 字]: 全てをふまえ、よりよい指導案の立案と授業改善に向けて今後自分が取り組むべき課題について、箇条書きで述べる。

< 見本 >

KU 英教法 II () __月__日実施「後期 MT の振り返りレポート」	
2017 年__月__日提出	
1. 指導案の狙いと工夫:	タイトルに自分の MT 実施日を書く
2. 他学生からのコメント	
1) 良かった点:	
※途中は省略	
1~6 まで最初に各項目(番号を含む)を書いた上で、文を書く	最後にレポート全体の総文字数を書く
1)	
2)	
*総文字数()文字	
MT 記号(---) 専用番号() 学籍番号() 氏名()	

MT は実施日対応アルファベットと数字の組み合わせで示された各 MT 記号 [例] A-2
※なお氏名欄はレポートの両面に記載する

「英語科教育法 II」における J-POSTL の活用

大崎さつき（創価大学）

1. はじめに

本稿では、J-POSTL の模擬授業の実践における活用事例について述べる。これは Orlova (2011) の提唱している EPOSTL の教員養成段階での活用法の 6 段階の内、第 1 段階から第 4 段階にあたる。J-POSTL を授業に取り入れるにあたり、自己評価記述文が多く、また教授経験のない履修生にはその内容を理解するのが特に難しいという課題がある。そこで筆者は、教職課程の必修科目「英語科教育法 II」の授業において学期最後に行う模擬授業だけでなく、その前に実施している 4 回のピアティーチングに対して、J-POSTL の自己評価記述文を繰り返し活用して省察を促すことにした。そうすることで、履修生が自己評価をするとき、あるいは生徒役としてフィードバックを行う際に、理論の理解とともに体験的に記述文の内容を理解し、多角的な視点から省察することができることを目的にこの事例を行った。

2. 実践の背景と概要

2.1 実践の背景

本稿での J-POSTL を活用した実践の対象は、筆者が授業を担当する「英語科教育法 II」（半期・2 単位、以後「英教法 II」と略）2 クラスである。本学では、英語科教育法 I～III を 3 名の教員で担当している。「英語科教育法 I」では主に Methodology を講義形式で学習する。「英教法 II」では、Lesson Planning, Conducting a Lesson を主に扱う。「英語科教育法 III」で、各スキルや語彙指導などの最新の指導法とその背景にある理論について総合的に学習する。現時点では、筆者が担当する「英教法 II」のみで J-POSTL を実践しているが、同僚の理解を得ながら、将来的には教職課程を通じて J-POSTL を活用したいと考えている。今期から、Orlova (2011) の活用法を参考に、「英教法 II」では、授業内容に特化した Lesson Planning と Conducting a Lesson を扱うこととした。本稿では、このように単発的に J-POSTL を教職課程科目で活用した実践例を報告する。

2.2 実践の概要

「英教法 II」は中学・高等学校の英語科教員免許状の取得を希望する教職課程に学ぶ履修生の中の主に中学・高校の英語教員を目指す学生を対象と

する必修科目で、受講生の大半は 2 年生である。授業は主に中学校の英語教師に必要な基礎的な授業力・指導力の習得を目指している。履修生は、英語教員になった際、即応できる目標や評価の設定・指導過程・指導技術に関する基本的知識と技能を身につけていく。

授業では、主に J-POSTL の「自分自身について」のセクションと模擬授業における J-POSTL の自己評価記述文を活用している。「ドシエ：学習・実践記録」セクションそのものは使用せず、ファイルに作成した指導案や教材、自己評価・相互評価シートなどを綴じる形式で実践記録をまとめている。最後にドシエの中身を一覧にしたものを作成し、表紙としている。

「自分自身について」の活用については、第 1 回目～第 2 回目の授業において、履修生が学生からの視点からではなく、教師目線で授業を見る感覚を養う必要があることを意識することや、これからの大学生活において履修生自身が英語力や現場での経験（学校ボランティアなど）をどのように積んでいくべきかを考える機会として重要であると考えている。そのため、筆者は、「自分自身について」グループ討論することから J-POSTL を使い始める。また、このグループ討論は ice breaker の役割も果たしており、クラスの雰囲気作りにも役立っている。この活動から始めることで、自身の英語学習に影響した可能性のある教師の存在や授業方法などについて振り返るとともに、自分が目指す教師像（教師ビリーフ）とはどのようなものであり、そのためには今の自分には何が必要なのかを考えることが可能になる。

第 2 回以降については、指導に関する基本的理論や知識を学習したあと、主に文法指導過程における各指導技術（Oral Introduction, Drill 活動など）を小グループ内でピアティーチングする機会を 4 回設け、その指導手順、内容、英語による指示の適切さなどに関連する J-POSTL の自己評価記述文を使用して省察する。学期末にこれまでのピアティーチングをまとめて 1 時間の指導案を立案する。そして 1 時間の指導案のうちの 15 分間を履修生が模擬授業（=Micro teaching 以降 MT と略）として単独で行う。この小グループでのピアティーチングが学期末に実施する模擬授業のリハーサルの役割も果たしている。また、このピアティーチングについては、毎回、生徒役の学生、筆者あるいは Teacher Assistant (TA) からのフィードバックをもとに発表者が省察する機会を確保している。「自分自身について」のセクションは 2013 年から 4 年間行っており、模擬授業における活用について本格的に取り入れたのは 2017 年度からである。

3. 「英語科教育法 II」における J-POSTL の活用

第 1 部で紹介されている EPOSTL 活用の「6 つの段階」（Orlova, 2011）

に当てはめると、本授業で行っているのは、「J-POSTL の導入」(第 1 段階)、「自己評価のセクションの選択」(第 2 段階)、「自己評価記述文の授業での活用」(第 3 段階)、「模擬授業での自己評価記述文の活用」(第 4 段階)の 4 つである。この段階を意識した J-POSTL の活用を示したものが図 1 となる。

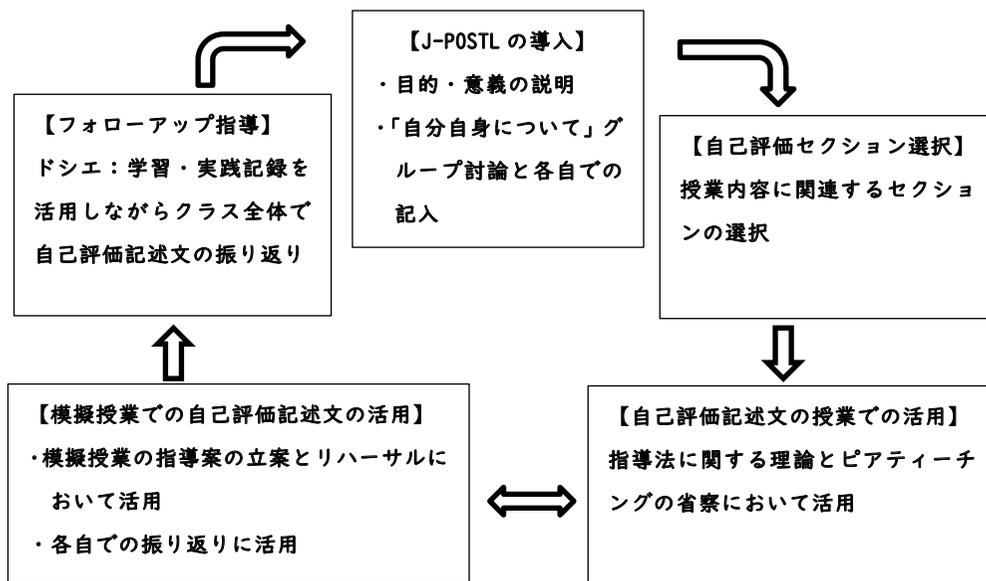


図 1. 「英語科教育法 II」における J-POSTL の活用サイクル

本稿では、EPOSTL 活用の「6 つの段階」(Orlova, 2011: p.28)を踏まえながら、筆者が担当する英語科教育法の授業で行っている J-POSTL を活用した実践とその取り組みについて報告したい。実践例 1 は、「自分自身について」の活用例、実践例 2 では「自己評価記述文」を活用した例、実践例 3 は、「ドシエ：学習・実践記録」の例を報告する。

3.1 J-POSTL 活用実践例 1 「自分自身について」の利用

最初の実践例は、J-POSTL の「自分自身について」の頁 (pp.8~9) を用いた取り組みである。EPOSTL 活用サイクルでは、第 1 段階の履修生への J-POSTL 導入の段階に当たる。

■利用時期：

学期当初，9 月の第 1 回，第 2 回の授業，および学期末の授業

■利用箇所：

「自分自身について」(J-POSTL pp.8~9)

① 「自分自身について」の意見交換 [第 1 回授業]

特に「I 過去の英語学習体験」の「a) よかった授業」(p.8)、さらに「4 教師の資質能力」(p.9)について、グループ内、さらに全体で共有を図った。まずグループ討論で、共通項目や相違点について意見交換を行った後、キーワードをまとめフリップに書いて示す形式でグループ毎に意見交換後、内容を全体に発表させた。

②「自分自身について」を記述式アンケート（提出課題）として利用〔第 2 回授業〕

第 1 回目のグループ討論の内容を振り返りながら、「自分自身について」(J-POSTL, pp.8~9) のすべての項目について記入することを課題とし、それを第 2 回の授業に持参させた。授業内では、特に「4 教師の資質能力」の記述内容について、各自が考えてきた資質能力とは具体的にはどのような能力かをグループ内で討論し、その重要性について意見交換をし、さらに英語教師に求められる資質能力についての理解を深める機会とした。履修生は、授業指導に必要な基礎的な知識や実践的な経験がない 2 年生が 9 割を占めることから、初回 2 回の授業を使って時間をかけて、「英語教師」に求められていることを理解させることがねらいである。

③ 最終授業でのまとめの時間に「自分自身について」を再度利用

最後の授業では、自分が目指す教師像、及び授業の在り方をあらためてテーマに取り上げた。履修生は年度当初に記述した「自分自身について」の記入内容を見直した上でこれまでの自分の成長や今後の課題をグループの中で話し合った。卒業までの 2 年間で留学などを通して英語力を上げることへの強い動機付けになったことや学校インターンや学校ボランティアなどに積極的に参加していききたいなどのさらなる成長への積極的な態度がみられた。

■指導上の工夫や留意点：

- ・ 履修生から出てくる意見に対して、授業担当者が多くの説明を加えたり、価値判断をするのではなく、まずは自由にこれまでの経験を話せるよう配慮することが重要である。前述したとおり、「自分自身について」のグループ討論の目的は、自身の英語学習に影響した可能性のある教師の存在や授業方法などについて振り返ることと、クラスの雰囲気作りであることを念頭においておく必要がある。
- ・ グループでの討論については、グループ内での意見交換で出てきたものを類似した意見ごとに分類し、それにキーワードをつけるように指示している。その後、クラスで各グループの意見を発表させる際には、キーワードを示しながら回答に対する理由を述べるように指示している。これはクラスで意見の内容を共有し、スムーズに話を進めるのに役立つ。

3.2 J-POSTL 活用実践例 2 実演と模擬授業に関連する「自己評価記述文」を活用した例

次に、授業中の小グループ内でのピアティーチングと模擬授業指導に関連する J-POSTL を利用した実践例について報告したい。これは 6 つの段階の内、第 2 段階から第 4 段階に対応している。さらに学期末に総まとめとしてクラス全体でフォローアップ指導を行っている。

■利用時期：

模擬授業前～後（9 月～11 月）の授業時

■利用箇所：

「自己評価記述文（＝以降 SAD）」で、96 記述文の SAD の中からピアティーチング（各指導過程・技術の実演）と模擬授業と関連する 11 記述文を選択して利用した。選択した SAD については、資料 1 を参照して頂きたい。

①各指導技術と関連する SAD の選択 【授業開始前の準備段階】

授業担当者が英語科教育法の授業指導計画検討の際、ピアティーチングや MT のねらいをふまえて、準備計画段階から MT 実施後の振り返り段階まで、関連がある SAD を J-POSTL から選択した。

②選択 SAD の提示及び授業指導内容との関連付け

【ピアティーチングの実演前：第 4～10 回授業，MT 準備段階：第 10～11 回】

- ・各指導技術に必要な知識や技能と共に、英語科教育法の授業の中で指導内容と関連する選択 SAD を履修生に提示した。履修生は、提示された選択 SAD を、ピアティーチングの準備段階にあたる指導案の立案やりハーサルなど、各自が準備を進める際の振り返りに利用した。
- ・履修生は、MT の準備段階で、これまでに教員から提示された SAD から、1～2 個の SAD を選択した。MT の指導案の立案やりハーサルなどを進める中で、自身で選択した SAD を振り返りツールとして活用した。

③MT 期間中の自他の MT 振り返りツールとしての選択 SAD 利用

【ピアティーチングの実演中：第 4～10 回授業，MT 期間中：第 10～11 回】
ピアティーチングの実演中、および MT 期間中、SAD は自他の実演や MT 振り返りのための視点や観点を提供した。履修生はまず実施直後の教員あるいは TA からのフィードバックや振り返りを通して互いのピアティーチングや MT から学び合う。その後さらに、他の履修生からのコメントシートの内容も踏まえて、SAD の各記述文の自己評価を行い、再度自分のピアティーチングや MT を振り返る。ピアティーチングや MT 後に、これまでの実演と最後の MT に対する SAD による自己評価の推移を確認することで、自身の授業力の向上や今後の課題を履修生が振り返り、また自覚できることを意図した

ものである。

④ フォローアップ指導：SAD を利用した MT 全体の振り返り

〔MT 終了後：第 15 回授業〕

MT 期間が終了した後の授業では、最初に、グループ内で、利用した SAD の伝える内容を具体的な授業指導場面例を挙げて説明させた。具体的に履修生がこの授業を通して何を学び、どのような点に配慮してピアティーチングや MT を実践してきたのかをクラスで振り返ることを意図したものである。また、この活動を通して、初めは SAD の内容を深くは理解できなかった履修生も、最後の授業では、利用した SAD の内容を理解できていることに気づき、その点においても 15 週間で自分が成長できたことを実感できる機会となった。最後に、グループ単位で選択 SAD に関する自己評価や自分の解釈、疑問点など意見を出し合った。この意見の共有と話し合いを通して、履修生それぞれの今後の課題や目標の明確化を促すことができる。

■ 指導上の工夫や留意点

- ・ SAD への記入については、学期開始当初は SAD の理解が不十分であり、履修者間で数値や受け止め方が大きく異なる。SAD の記入への不安を取り除くために、Orlova (2011) が提案しているように、SAD の語尾に「～できる用意ができていると思う」という言葉を足すことで、できたか否かを断定することを避けるようにしている。こうすることで自己評価に対するハードルが低くなるのではないだろうか。
- ・ J-POSTL の項目数をかなり厳選して実践した。この「英教法 II」で身につけたいことを明確にし、それに関連する項目のみを繰り返し扱うことで、履修生が SAD の内容を理解し、内在化できるようにした。事実、履修生同士、授業担当者や TA からのフィードバックをもとに、何度も SAD を利用して自己評価を繰り返すうちに、その項目の内容を徐々に理解していけるのではないかと感じている。半期という短い期間でできる MT は一度きりであり、SAD の内容を深めるための時間も限られている。MT の前に実施しているグループ内でのピアティーチングの段階から、何度も記述文に沿った省察をすることで、理解を徐々に深めていくことで最後の MT につなげていくことが重要である。
- ・ Orlova (2011) も提案しているように、履修生に自分の学習に責任を持つことを意識させるため、ピアティーチングで扱ってきた SAD から 1～3 個の SAD を選択させ、それらができることを目標に模擬授業を立案、実施している。
- ・ SAD の 2 回目以降からの記入について、前回に記入した数値から低い数値になってもかまわないことを最初に説明しておく必要がある。

- ・ 授業担当者や TA からの適切なフィードバックを与えることが重要となる。毎回の授業の終わりに、その日の振り返りを授業担当者と TA で行い、フィードバックの与え方や疑問点などを共有し、次の授業に生かすようにしている。

3.3 J-POSTL 活用実践例 3 「ドシエ：学習・実践記録」の利用

学期中、履修生は、授業で作成したすべての指導計画案、自己評価表、相互評価表、教材、作成したワークシートなどをファイルにまとめていく。提出物一覧表を別途作成し、配布し、ファイルの表紙とした。綴じたものについては、一覧表にチェックをしていった。MT のフォローアップのときに、これまで作成したものを見返しながら、ピアティーチングや MT を SAD の内容を踏まえながら具体的に振り返ることができた。

4. おわりに

本稿では、J-POSTL の活用について、「J-POSTL の導入」（第 1 段階）、「自己評価のセクションの選択」（第 2 段階）、「自己評価記述文の授業での活用」（第 3 段階）、「模擬授業での自己評価記述文の活用」（第 4 段階）での活用について報告した。本授業では、スモール・ステップで自己評価記述文を理解していくことを目的に行った。J-POSTL に興味はあるが、どこまで何を取り入れ、どのように活用すればいいか不安を感じる授業担当者も多いだろう。まずは実践例 1 で報告した「自分自身について」から初めてみることをお勧めしたい。履修生が抱えている不安とともに思い描く教師像も共有でき、その後の授業の心構えも変わるのを感じられるだろう。そして次の年度に、英語科教育法などの担当科目で掲げている目標や内容と J-POSTL の SAD の内容で重なる点があれば、その記述文だけでいいので、授業の中に取り込んでいくことで、授業担当者と履修生が目指す目標が明確となるだろう。

今後の課題としては、ピアティーチングや MT の後に、ディスカッションの時間をもっと十分に設けることである。授業中の時間配分を見直し、深い省察を促すための話し合いの機会を持つことに重点をおいた授業構成を検討したい。

引用文献

- Orlova, N. (2011). Challenges of integrating the EPOSTL into pre-service teacher training. In Newby, D., Fenner, A.-B, and Jones, B. (eds.) *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 19-28). Strasbourg/Graz, Council of Europe Publishing.

資料Ⅰ 成長のためのツール「J-POSTL」を用いた振り返り記述文一覧

1) 分野		2) 自己評価記述文	
IV 授業計画	P27	B	4. 目標とする学習活動に必要な時間を把握して，指導計画を立案できる。
			5. 学習者がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。
			6. 学習者のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。
	P28	C	3. 英語を使うタイミングや方法を考慮して，授業計画を立案できる。
V 授業実践	P30	A	1. 学習者の関心を引きつける方法で授業を開始できる。
			2. 指導案に基づいて柔軟に授業を行い，授業の進行と共に学習者の興味・関心に対応できる。
			3. 学習者の集中力を考慮し，授業活動の種類と時間を適切に配分できる。
			5. 予想できない状況が生じたとき，指導案を調整して対処できる。
		B	1. 授業内容を学習者の持っている知識や身近な出来事や文化等に関連づけて指導できる。
		P31	C
	P32	E	1. 英語を使って授業を展開するが，必要に応じて日本語を効果的に使用できる。

教育実習における J-POSTL の活用

大崎さつき（創価大学）

1. はじめに

本稿では、J-POSTL の教育実習の実践における活用事例について述べる。これは Orlova (2011) の提唱している EPOSTL の教員養成段階での活用法の 6 段階の内の第 5 段階にあたる。教育実習については、実習事前・事後指導を担当していない場合は、履修生全員に J-POSTL を活用するのは難しい。そのような状況において、たとえば、上述の英語科教育法 II で J-POSTL を使用した履修生が、その後も自律した学習者として自身の成長のために各自で活用できないだろうかと考えた。英語科教育法 II とその後の教育実習の連携を実現するために、教育実習での J-POSTL の活用がどのように影響を与えるかを調査し、その結果を見据えて英語科教育法 II の授業に活かしたいと考え、この事例を行った。

2. 実践の背景

本稿では、筆者の演習（ゼミナール）履修生のうち教育実習を控えた教職課程履修生を対象に J-POSTL を活用した実践例について報告する。筆者が「英語科教育法 II」のみしか担当しておらず、授業として、教職課程履修者の総仕上げともいえる教育実習における J-POSTL の活用を実施できないため、筆者のゼミ生を対象に活用した。これは、今後の教科教育法全体での J-POSTL 活用につなげるための取り組みである。

筆者が担当する「演習 III」「演習 IV」を履修しているゼミ生の約 8 割は教職課程履修生であることから、教育実習を控えた 4 年生、5 年生を J-POSTL を活用した実践の対象とした。対象者は全員「英教法 I」、「英教法 II」（筆者担当）、「英教法 III」の修得は前年度の段階で終えている。教育実習前の準備段階から 3～4 週間の教育実習期間中、さらに実習後に至るまで、その振り返りに J-POSTL を活用することで、ゼミ生の実習経験を活かし、充実させたいと考えた。

3. 教育実習における J-POSTL の活用

本稿は J-POSTL の教育実習中の活用事例であり、Orlova (2011) の提唱している EPOSTL の教員養成段階での活用法の 6 段階の内の第 5 段階に特に焦点を当てた事例である。図 1 にあるように、活用にあたっては、次のよう

な段階を踏んでいる。

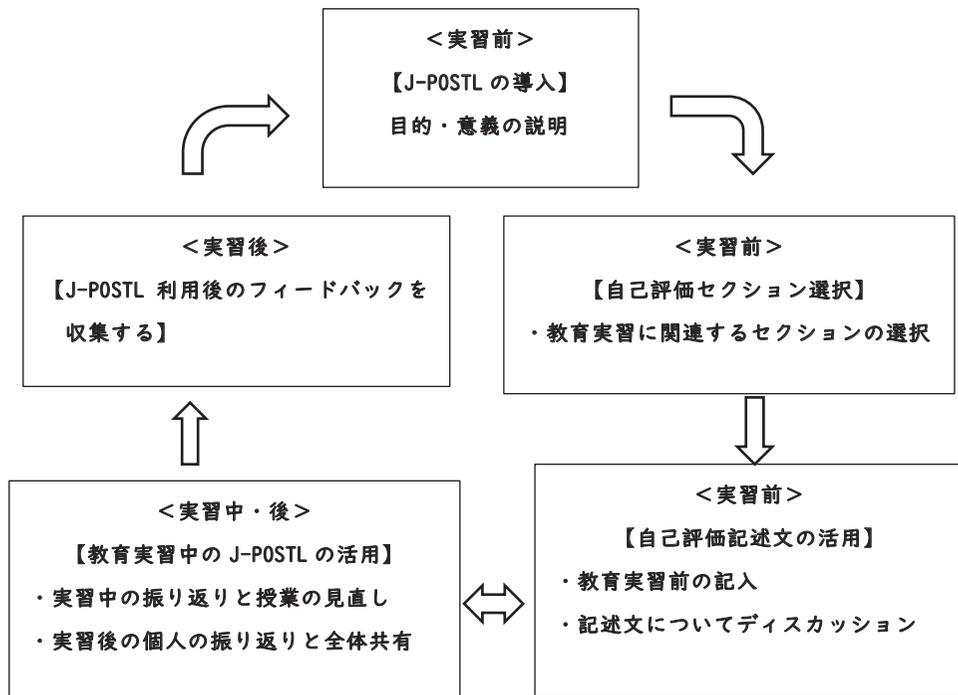


図 1. 教育実習における J-POSTL の活用サイクル

3.1 教育実習に関連する「自己評価記述文」の活用

■利用時期：

4 月（＝教育実習前）、5 月～6 月（教育実習中～教育実習後）

■利用箇所：

「自己評価記述文（以降 SAD）」から、「IV 授業計画」「V 授業実践」の全記述文を対象とした。

■実践の概要

教職課程履修者であるゼミ生を対象に、実習前、実習中、実習後の 3 回にわたり、J-POSTL を利用して自分自身の実習の振り返りを行った。実習後については、筆者と実習生でその内容を共有し合った。授業実践の具体的な手順と内容は以下の通りである。

① 教育実習に関連する SAD の選択と提示 [教育実習開始前の準備]

事前に実習を控えた実習生全員に「IV 授業計画」「V 授業実践」の全記述文を確認し、自己評価記述文の意味が理解できないあるいは不確かな記述文を挙げるように指示した。ゼミ終了後に全員で集まり、SAD の内容に関する疑問点や実習前で不安に思っていることなどを共有する時間を設けた。そのうえで、実習前に各自が自己評価記述文に記入をした。

② 教育実習期間中の振り返りツールとしての SAD 利用 [実習期間中]

実習期間中、実習生は自分自身の授業の振り返りに J-POSTL を記入することで、授業改善への取り組みを行った。この実習中の振り返りが学生にとっては一番有意義であったという意見が非常に多かった。具体的には、実習開始当初はうまくいかないことが多く、その中でどのように改善すればいいか実習校の指導担当者の指導を踏まえて省察する際に、実習中に SAD をチェックすることで、自分が忘れていた観点到気づかせてくれたという意見が多く聞かれた。

③ フォローアップ指導：SAD を用いた教育実習各自の振り返りと全体共有 [実習後の振り返り]

実習先から戻った直後のゼミの後に、J-POSTL や SAD を活用しながらそれぞれの実習内容とその振り返りについて、共有し話し合う機会を設けた。振り返りの際の SAD については、各実習生が成長したと感じる記述文とその理由、課題として残った記述文や現場で教えてみて新たに疑問に思ったことなどを SAD の項目を参照しながら共有した。

■ 指導上の工夫や留意点

- ・利用する SAD について

Mehlmauer-Larcher (2011) の「教育実習段階のチュートリアルにおける EPOSTL の活用」にもあるように、基本的な自己評価記述文をいくつか選択し、それをもとに理論的背景知識とともに十分に記述文の意味をグループで話し合うことが重要である。

- ・実習中の振り返り：

事前に基本的な自己評価記述文は選択していくが、各実習生に適した省察を行えるよう、実習校の実態に応じた SAD を実習生が選択するべきだと今回の取り組みから感じた。

- ・実習後のフォローアップ：

事前に、話し合う点について記述したものを持参させるほうがスムーズに進めることができる。実習生同士が話し合えるように、教員は facilitator としての役割を果たすことで、実習生からの気づきが促せる。

4. おわりに

本稿では、第 1 部で紹介されている EPOSTL 活用の「6 つの段階」を意識して行った教育実習における J-POSTL の活用について報告した。今回の活用を通して感じられた実習生の成長や現場での戸惑いや疑問、SAD を活用したことで気づいた点をまとめて、来年度の教育実習生たちの実習前の打ち合わせに活かすことで、教育実習という大きな経験を充実したものにしたいと考えている。また、実習生からのフィードバックを英語科教育法 II での J-POSTL の活用に生かす方法を検討していきたい。

今後の課題として 3 点挙げたい。1 点目は、SAD の選択とその数についてである。実習校の実態はそれぞれ異なるため、「IV 授業計画」「V 授業実践」の全 SAD を振り返りの対象としたが、授業担当者が事前に基本的な教育実習に関連する共通記述文を選択したほうが、教育実習前後の SAD の内容についての討論なども焦点が絞れ、学生にも負担が少なかったように思う。2 点目は、SAD の記入方法についてである。SAD による自己評価については冊子への記入ではなく、A4 用紙 1 枚にまとめたものを使用したほうが、使い勝手がよいのではないかという意見が実習生からあった。次回は、これらの意見も参考に必要最小限の項目を事前に A4 用紙にまとめたものを準備したいと考えている。3 点目は、教育実習前の自己評価記述文に関する話し合いの機会を十分にもつことである。十分なチュートリアルの時間をとり、これまでに学習した理論をもとに基本的な記述文についてグループで分析することが、その後の深い省察につながると考える。時間の確保と話し合いを効率的に進めるための工夫を今後検討していきたい。

まだまだ改善点が多いが、今回の初めての取り組みで SAD を活用した教育実習中の振り返りが、実習生の授業の建て直しに役立った可能性がある実感できた。実態の異なる実習校において、実習生は様々なことに直面するが、その中で、客観的に自分の授業を振り返るツールとして活用できたことは J-POSTL が教育実習中の省察で活用できる可能性を示唆できたといえよう。少しでも教育課程履修生の成長に役立つのであれば、部分的あるいは段階的であっても J-POSTL を取り入れていくことが大事だと考える。しかし、将来的には、教育実習に向けた準備を進めていく過程で、教職課程科目間や授業担当者間で J-POSTL のような共通した指針を持つことが履修生の成長を体系的に促進するためには重要になるだろう。J-POSTL を授業担当者間で活用していくには、周りの理解と協力が必須だが、段階的な活用ができることをまずは提案し、学生の反応を周囲に伝えていくことが大切だと筆者自身感じているところである。

引用文献

- Mehlmauer-Larcher, B. (2011). Implementing the EPOSTL in the early phase of pre-service EFL teacher education. In Newby, D., Fenner, A.-B., and Jones, B. (eds.) *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 29-36). Strasbourg/Graz, Council of Europe Publishing.
- Orlova, N. (2011). Challenges of integrating the EPOSTL into pre-service teacher training. In Newby, D., Fenner, A.-B., and Jones, B. (eds.) *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 19-28). Strasbourg/Graz, Council of Europe Publishing.

「英語科教育法特論」における J-POSTL の活用

高木亜希子（青山学院大学）

1. はじめに

本稿は、省察を核にした英語科の教職科目における J-POSTL の活用方法についての実践事例報告である。筆者は、教職課程の必修科目「英語科教育法特論」の授業において、省察を促すために、J-POSTL を活用するとともに、授業中に授業で扱う理論等について履修生同士での話し合いの機会を設け、毎授業後に電子掲示板に授業の振り返りを投稿してもらっている。

近年、教師教育では省察（振り返り）の重要性は広く認識されており、よく知られている 2 つの概念は、Schön(1983)の「行為の中の省察(reflection in action)」と「行為についての考察(reflection on action)」である。「行為の中の省察」とは、行為をしている時（例えば授業中）に、そこで何をしているか考えることである。教師にとって、授業中の多くの行為は、当たり前のことであり、全ての行為を常に省察せず、活動することによって知っている状態(knowing-in-action)となる。活動することによって知っている状態は常に変化しており、新しい状況や出来事に直面したときに、行為の中の省察を行い、新しい状況に素早く対応する。「行為についての省察」とは、行為が終わった後（例えば授業後）に、活動することによって知っている状態が新しい状況にどのように対応したか、行為を振り返る。行為を振り返ることで、実際に行われた行為やその状況に対して見方を変え、新たな視点を獲得。したがって、教師にとって授業後の省察は、次の実践につながる重要な役割を果たす。

上記 2 つの概念は、実践に基づいた省察に重きを置いているが、大学の教職課程の履修者は、授業外の実践の機会があまりない。したがって、Fenner(2012)は、批判的省察能力を育成するために、実践だけでなく、理論的背景知識について省察することが重要であると主張している。実際、Mehlmauer-Larcher(2011)は教職課程の講義科目において、EPOSTL を用いて省察を促すことで、実践的英語教授力の基盤となる理論的背景知識の獲得も意図している。また、Urzúa and Vásquez(2008)は教師の専門性の向上のために、特に経験年数の短い教師に対して、計画を述べたり、結果を予測したり、将来の実践について省察したりする「行為のための省察(reflection for action)」の機会を与える必要があると述べている。

日本の私立大学の教職課程では、1年生から3年生までは、教職や教科に

関する科目についての基礎的な知識や技能を学び、4年生になって初めて教育実習で教育現場での実践を行うことが一般的である。たとえ、大学の授業において理論が中心であっても、教職課程で J-POSTL を活用し、英語教授力の下支えとなる知識・技能の省察や将来の実践を見据えた「行為のための省察 (reflection for action)」を促すことで、教育実習の準備をすることは重要である。

2. 実践の背景と概要

2.1 実践の背景

本学の教職課程（中学校・高等学校，英語科）では，2018年2月現在，教職科目として「各教科の指導法」である「英語科教育法」（通年・4単位）と「英語科教育法特論」（通年・4単位）は3年次に開講されており，教育人間科学部教育学科と文学部英米文学科の学生が必修科目として履修している。4年次に教育実習に行く前に，履修者が英語科の理論や技術について学ぶことができる科目はこの2科目である。これらの科目は共に，2クラスずつあり，前者は同一教員が担当し，後者は筆者と別の教員が担当している。他に，英語科の指導に関わる科目として，「中等教育実習 I（前期・2単位）」が3年次に開講されているが，本授業は，教育実習事前講義として，教育実習全般の内容を扱う必要があり，英語科の模擬授業に十分時間を当てることは難しい。

筆者は，本学において，8年間「英語科教育法特論」を担当してきた。履修者は，年によって異なるが，2017年度は約60名であった。中高の教職につかない履修者も多く，履修者の進路は様々で，動機づけも多様である。毎週1コマしかない授業であっても，知識伝達型ではなく，省察を促す教員養成を行いたいと考えて実践を行ってきた。

2.2 実践の概要

「英語科教育法特論」の授業の概要を述べる。受講者数は，2017年度を例として挙げると，59名（男子21名，女子38名）で，3年生53名，4年生6名である。また，専攻の内訳は教育学科36名，英米文学科23名である。授業は前期15週，後期15週の計30週で，英語授業実践における理論的な考察をした上で，具体的な学習活動の事例を理解し，有機的な授業設計ができることを目指している。1年間の授業において，前半は「学習指導要領と英語教育の目的」，「国際語としての英語とコミュニケーション能力」，「英語教育における文化」，「学習者論」，「教師論」などの理論的テーマを扱い，後半は「リーディング指導」，「スピーキング指導」，「言語材料の指導」などの実

践的テーマを扱っている。

授業では、省察を促すために、3つの要素を取り入れている。1つ目が、授業中のディスカッションである。受講者の席を指定し(2週に1度席替え)、できるだけ多くのクラスメイトと過去の学習経験や英語教育の理論についてディスカッションをすることで、多様な視点を学び、個々の省察を促すことを意図している。2つ目が、毎週授業後に授業の振り返りを電子掲示板に投稿することである。電子掲示板は大学が管理する授業支援用のポータル内に設置されており、投稿された振り返りは、受講者のみが閲覧できるようになっている。したがって、受講生同士が振り返りを読み合う機会となる。また、毎回の授業の始めに、筆者は、投稿された振り返りからいくつかを選び、内容を紹介するとともに、口頭でフィードバックを行っている。3つ目が、J-POSTLの活用である。授業外で、各自が、「自分自身について」「自己評価記述文」に取り組む課題と授業中に、自己評価記述文をいくつか取り上げ、ディスカッションする活動を取り入れている。これら3つの省察の要素のうち、最初の2つは2010年から8年間行っており、J-POSTLは2011年より7年間取り入れている。

3. J-POSTLの活用

3.1 「6つの段階」におけるJ-POSTLの活用

第1部で紹介されているEPOSTL活用の6段階(Orlova, 2011)に当てはめると、本授業で行っているのは、「J-POSTLの導入」(段階1)、「自己評価のセクションの選択」(段階2)、「自己評価記述文の授業での活用」(段階3)、「J-POSTLに対する教職課程履修者の反応の調査」(段階6)の4つである。この段階を意識したJ-POSTLの活用を詳細に示したものが次ページの図1となる。

4つの段階のうち、「自己評価のセクションの選択」では、「自分自身について」と「自己評価記述文」の2つのセクションを選択し、「学習・実践記録」は用いていない。その理由として、教職履修カルテがあることと、週1回の授業のためだけの課題として、記録を行うことは負担であると考えたからである。「自己評価記述文の授業での活用」では、授業中のディスカッションと授業外の課題の2つの方法を行っているが、授業外の課題は方法を改善しながら活用してきた。

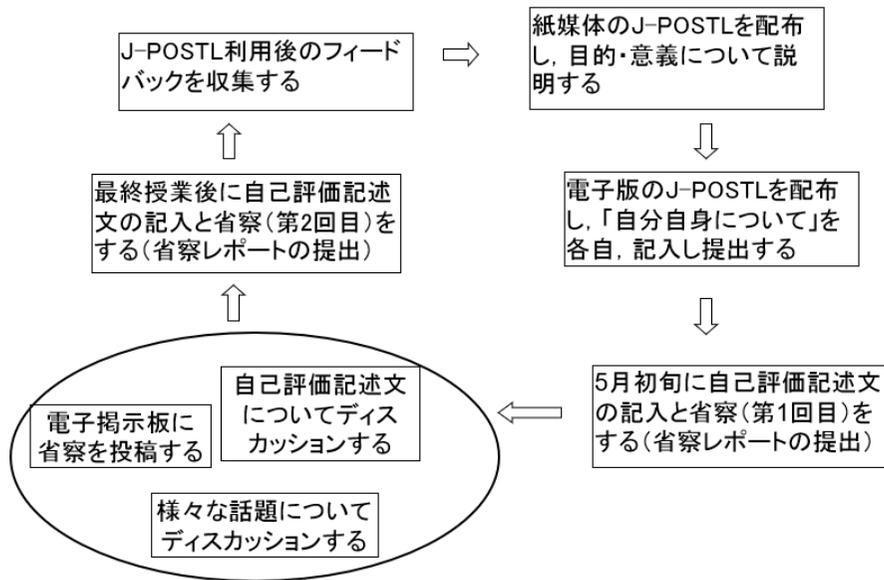


図1. 「英語科教育法特論」における J-POSTL の活用サイクル

3.2 J-POSTL の導入と「自分自身について」の活用事例

■利用時期： 4月～5月

■利用箇所：「自分自身について」

■実践の概要

①J-POSTL の導入

初回の授業で、紙媒体の J-POSTL を配布し、20 分程度で J-POSTL を紹介している。まず、J-POSTL が CEFR を源泉として開発された EPOSTL を日本の文脈に合うように翻案化したものであり、学んだことを振り返り、内在化し、実践力に近づけるためのリフレクション・ツールであることを述べる。次に、J-POSTL の理念に関して「学習と教授の省察モデル」、 「CLT と行動志向の言語観」、 「学習と教授の自律観」、 「生涯教育」の概要を説明し、利用期間(教職課程履修時から教育実習を経て教職に就くまで)と J-POSTL の構成について説明する。また、J-POSTL の第 1 期・第 2 期経年調査(高木, 中山, 2012; 中山, 山口, 高木, 2013)の結果の概要を紹介し、J-POSTL 意義を学生に示す。最後に、J-POSTL を 1 年間でどのように使うか計画を提示している。

②自分自身について

「自分自身について」は、大学のサービスであるオンライン授業支援システムを利用して、電子版ファイルが 4 月に配布され、各自が記入した上で、

5月上旬にシステム上で提出する。5月上旬に提出期限を設けている理由は、4月中旬まで受講者が確定しないことと、ゴールデンウィーク中に「自己評価記述文」についてじっくり取り組む時間を確保するためである。「自分自身について」の記述は、受講生同士で共有すると良いと思われるが、本授業では行っていない。

■指導上の工夫や留意点

J-POSTL の導入は、できるだけ早い段階で行い、その意義や内容及び使用計画を丁寧に履修者に伝えることを心掛けている。紙媒体での配布は、いつでも参照できるようにするためである。また、動機づけの高い履修生には、教育実習時や卒業後も使用してもらいたいという願いもある。ただし、紙媒体は教師側にとっては、モニターや管理が難しいので、「自分自身について」の箇所は、電子版ファイルを配布することで、管理を容易にしている。

3.3 「自己評価記述文」の活用事例

3.3.1 授業中のディスカッション

■利用時期：前期2回、後期3回

■利用箇所：「自己評価記述文」の4分野（I 教育環境，II 教授法，IV 授業計画，V 授業実践）26 記述文

■実践の概要

「自己評価記述文」は、授業中のディスカッションに取り入れている。図1示すように、1年間の授業において、省察を促すツールは、毎授業後の電子掲示板の投稿、授業中のペア・グループディスカッション、J-POSTL の「自己評価記述文」のディスカッションの3つで構成されている。「自己評価記述文」は、授業中のディスカッションの機会を5回（前期2回、後期3回）設けている。授業用の配布シートには、計26記述文（表1参照）を記載するが、授業でディスカッションする記述文は各回一つ5～10分程度である。例えば、I 教育環境 C.言語教師の役割「1.学習者と保護者に対して英語学習の意義や利点を説明できる」を扱った場合、記述文の語句「英語学習の意義や利点」に着目し、授業で学んだ理論も参照しながら、その語句が具体的にどのようなことを表すか、ペアで話し合い、その後クラス全体で共有する。

表 1. 授業中に扱う「自己評価記述文」

自己評価記述文を扱う授業	扱う項目
第 6 回「教師論」	I 教育環境 C 教師の役割 1-8
第 8 回「学習者論」	I 教育環境 B 目標とニーズ 3 IV 授業計画 B 授業内容 7 V 授業実践 C 学習者とのインタラククション 5
第 18 回「リーディングの指導」	II 教授法 D リーディング活動 1-7
第 23 回「自己表現活動の指導」	II 教授法 B スピーキング活動 1-6
第 29 回「学習指導案の作成と教室の使用言語」	V 授業実践 E 教室での英語 1-2

■指導上の工夫や留意点

上記で例として挙げた語句の具体例として、「母語と異なる言語を学ぶことによって、言語そのものへの関心を深め、言葉の構造や働きについての理解を深める」、「国際社会において自ら考え、その考えを相手に明確に主張できる価値観や物の見方を育成する」などが挙げられる。各記述文の解説については、「J-POSTL：教育現場への文脈化の試み」（清田他，2010）と「授業力のめやすー教授法に関する記述文の解説」（神保，石田，遠藤，2012）が参考になる。履修生が戸惑っている場合は、これらの解説を参考に具体例を示すとよいだろう。

3.3.2 授業外の課題

■利用時期：年度当初（4～5月）、年度最後（1～2月）

■利用箇所：『言語教師のポートフォリオ』について（pp. 1-2）, 『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ（EPOSTL）』の序論から（pp. 3-4）, 「本書の使い方（pp. 5-7）」, 「自己評価記述文」

■実践の概要

次に、「自己評価記述文」の授業外の課題としての活用方法を述べる。

① 1 回目の課題

J-POSTL の『言語教師のポートフォリオ』について（pp. 1-2）, 『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ（EPOSTL）』の序論から（pp. 3-4）,

「本書の使い方 (pp. 5-7)」を読む。次に、自己評価記述文を 7 分野のうち 2 分野を各自選択し、各記述文の矢印に記入する。その後、記入された自己評価記述文と、自由評価記述文に基づき省察したことや考えたことを記述した省察レポート (RJ) を、ワードファイル (A4 約 1 ページ, 1000~1200 語程度) で作成し、インターネット授業支援システムで提出する。締め切りは 5 月上旬である。

本課題の目的は、2 点ある。1 点目は、J-POSTL の背景、目的、意義について確認し、英語教師として求められている資質能力の全体像を俯瞰することである。2 点目は、英語授業力を支える知識や技術についてほとんど学習していない段階の各自の英語授業力の一部を認識させることである。実践を経験したことがない多くの履修生にとって、自己評価記述文を通して、各自の授業力について自己評価することは容易ではない。したがって、Mehlmauer-Larcher (2011), Newby (2011), Orlova (2011) が提案・実践しているように、「私は～できる」で自己評価することが難しい場合には、「私は～する準備がされていると思う、～の仕方を認識している」と言い換えて評価するように指導する。また、単なるチェックリストにならないように、全ての記述文に無理して回答することはないことを指示している。

②課題提出後の授業におけるディスカッション

提出後の授業において、課題に取り組んでみて、どのように感じたか、ペアで話し合い、クラス全体で共有する。この際、履修生から出された質問やコメントについて、適宜フィードバックを行い、自己評価記述文の役割を再確認する。例年、この段階では、自己評価記述文について深く省察することが難しく感じる学生が多い。しかしながら、英語科の指導について理論や技術をほとんど学んでいないので、難しいのは当然のことであり、心配することがないことを伝えている。

③2 回目の課題

全ての授業が終了後、1 回目と同様、自己評価記述文を 7 分野のうち 2 分野を各自選択し、各記述文の矢印に記入する。選択する分野は、第 1 回と同じでもよいし、異なってもよい。その後、記入された自己評価記述文と、自由評価記述文に基づき省察したことや考えたことを記述した省察レポートを、ワードファイルで作成し、オンライン授業支援システムで提出する。

本課題の目的は、第 1 回と比較して、自己記述文に基づく省察の質の変化と学びの進捗を実感してもらうことである。本課題は、別の期末課題とも関連がある。期末課題は 2 つあり、1 つ目では、年間を通して本授業で学んだ

ことを今まで提出した自分の RJ を参照しながら振り返り、何を学んだか 3 つの観点に絞って述べる。2 つ目では、英語教師を目指すものとして大切な資質能力について、3 つの観点に絞り、なぜその資質能力が大切か意見を述べる。また、その資質能力を育てるために、学生時代にできること（すべきこと）と、卒業してからできる（できそうな）ことについて具体的に記述する。これら 3 つの課題を統合して、年間の省察のメタ認知的なまとめとし、未来の具体的な行動も考察することを意図している。

■指導上の工夫や留意点

履修生による自己評価を指導教員がどのようにモニターするかという問題については、筆者は、Newby (2011) の考え方を参考にしている。Newby によれば、EPOSTL は「履修生の所有物」であるが、指導教員が履修生のポートフォリオの使用にどのように関与するかどうかは、それぞれの教員と履修生が決めるべきことである。実際、彼の授業において、自己評価が授業参加の要件である一方で、各履修生がどのように自己評価しているかは確認していない。しかし、指導教員は、ドシエ（学習実践・記録）かオンラインの省察日誌の記述において、履修生が自己評価した際の根拠を確認している。

本授業において、筆者は当初の 3 年間（2011-2013）は、第 1 回と第 2 回の課題の両方で、自己評価記述文全てに取り組みさせていた。その理由として、本授業以外に J-POSTL の「自己評価記述文」のセクションに取り組む機会がなく、履修生に必要な英語授業力全てを把握してもらいたいと考えたからである。3 年間の取り組みを経て、この考え方は誤りであると気づき、2014 年からは、履修者が 2 分野を選択する方法に変更した。J-POSTL は「履修生の所有物」なので、履修生が自ら取り組みたい分野を選択すべきであるし、記述文が多すぎると深い省察をすることは難しい。

また、当初、自己評価記述文を記入したものと省察レポートの両方を課していたが、4 年目からは、省察レポートのみを提出してもらうことにした。その理由として、履修生の自己評価記述文の記入内容そのものからは、省察の具体的内容を見取ることができないので、電子掲示板に記述された毎授業後の省察レポートと自己評価記述文に基づいたレポートを確認することが重要であると考えたからである。

「授業利用後のフィードバックを収集する」（段階 6）に関して、授業全体に対する質問紙調査は行っているが、履修者に対する J-POSTL の活用に特化した質問紙調査や面接調査は行っていない。しかしながら、授業後に取り組みされた第 2 回目の課題を分析すると（例、高木，2015）、どのように履修者が J-POSTL を省察に用いたかが明らかになり、次年度の実践の改善に役立つ

ることができる。

4. おわりに

本稿では、J-POSTL の活用について、「J-POSTL の導入」(段階 1)、「自己評価のセクションの選択」(段階 2)、「自己評価記述文の授業での活用」(段階 3)、「J-POSTL に対する教職課程履修者の反応の調査」(段階 6)での活用について報告した。教職課程において、既存のカリキュラムにどのように J-POSTL を組み込んでいくかは、文脈により、各教師が創意工夫をすることができる。本授業では、省察を促すために、授業で扱う理論等についての授業中のディスカッションと毎授業後の振り返りの掲示板投稿と連携しながら、J-POSTL を活用してきた。

今後の課題として 3 点挙げたい。1 点目は、自己評価記述文の授業でのさらなる活用である。現在、30 回の授業のうち 5 回程度しか自己評価記述文を活用していない。深い省察を促すために、1 回の授業でとりあげる記述文は 1 つにとどめながらも、もう少し授業で扱う理論と記述文を関連させて活用する機会を増やしたい。2 点目は、他の授業を担当する教員との連携である。連携により、J-POSTL を使用する機会を増やしたり、体系的に活用するだけでなく、J-POSTL を介して同僚との対話が活性化すると思われる。3 点目は、模擬授業や教育実習での活用である。模擬授業については、筆者は「中等教育実習 I」を担当しているので、模擬授業のクラスディスカッションや各自の映像による振り返りの際に活用を試みたい。教育実習については、実習事前・事後指導を担当していないので、難しい面もあるが、本講義を受講している数名の 4 年生を対象にしたり、同僚の理解を得たりすることで、活用方法を模索していきたい。

引用文献

Fenner, A.-B. (2012). The EPOSTL as a tool for reflection. In D. Newby (ed.), *Insights into the European Portfolio for Student Teachers of Languages (EPOSTL)* (pp.29-50). Newcastle upon Tyre: Cambridge Scholars Publishing.

神保尚武, 石田雅近, 遠藤雪枝 (2013). 「授業力のめやすー教授法に関する記述文の解説」『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (代表: 早稲田大学 神保尚武) 研究成果報告書 (pp.60-72). JACET 教育問題研究会

清田洋一, 酒井志延, 伊東弥香, 浅岡千利世, 高木亜希子, 白井芳子, 久村

- 研 (2011). 「J-POSTL：教育現場への文脈化の試み」平成 22 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (代表：早稲田大学 神保尚武) 研究成果報告書 (pp.5-45). JACET 教育問題研究会
- Mehlmauer-Larcher, B. (2011). Implementing the EPOSTL in the early phase of pre-service EFL teacher education. In Newby, D., Fenner, A-B, Jones, B. (eds.) *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 29-36). Strasbourg/Graz, Council of Europe Publishing.
- 中山夏恵, 山口高領, 高木亜希子 (2013). 「J-POSTL 第 2 期経年調査」『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (代表：早稲田大学 神保尚武) 研究成果報告書 (pp.73-93). JACET 教育問題研究会
- Newby, D. (2011). Issues in using the EPOSTL. In Newby, D., Fenner, A-B., Jones, B. (eds.) *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 9-17). Strasbourg/Graz, Council of Europe Publishing.
- Orlova, N. (2011). Challenges of integrating the EPOSTL into pre-service teacher training. In Newby, D., Fenner, A.-B., and Jones, B. (eds.) *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 19-28). Strasbourg/Graz, Council of Europe Publishing.
- Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. NY: Basic Books.
- Urzúa, A., & Vásquez, C. (2008). Reflection and professional identity in teachers' future-oriented discourse. *Teaching and Teacher Education*, 24(7), 1935-1946.
- 高木亜希子 (2015). 英語科教職課程履修生による省察一言語教師のポートフォリオ-J-POSTL を用いて- 『言語教師教育』, Vol.2 No.1, 59-77.
- 高木亜希子, 中山夏恵 (2012). 「J-POSTL 第 1 期経年調査」『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (代表：早稲田大学 神保尚武) 研究成果報告書 (pp.8-46). JACET 教育問題研究会

教育実習における J-POSTL 活用の取り組み

浅岡千利世（獨協大学）

1. はじめに

本稿では、J-POSTL の教育実習中の活用事例について述べる。これは Orlova(2011)の提唱している EPOSTL の教員養成段階での活用法の 6 段階の内の第 5 段階に当たる。2017 年度言語教育 EXPO で教育実習における活用事例について「英語科教職課程履修生による省察：J-POSTL の活用事例」として発表報告を行い、その結果を基に 2017 年度に再度取り組んだ実践事例である。Orlova(2011)は、教室実践を経験できる教育実習の前後で教育実習生の教師としての考えに大きな変化が見られると述べている。一方で日本の教育実習の場合、教職課程の教師教育者は実習校に教育実習生の指導や評価を任せることが多く、彼らの成長に直接的に関与しづらいという現状がある。そこで教育実習生に教育実習中に J-POSTL をふり返りと自己評価のツールとして役立ててもらい、教育実習が実は教師としての成長の一連のプロセスにおける継続的な学びの一部であることへの気づきを目的としてこの事例を行った。

2. 実践の背景

本稿で J-POSTL を活用した実践の対象となった教職課程履修者は、2017 年 4 月から 2018 年 1 月までの期間に筆者が担当する必修科目「英語科教科教育法 II」（春学期 2 単位）「英語科教科教育法 III」（秋学期 2 単位）を継続受講した 25 名の内、自由意志で参加を表明した 8 名である。全員が所属学科の学科専門科目の内、教職課程の「教科に関する科目」に選択科目指定されている筆者担当の授業（「英語専門講読 I/II :Exploring Language Teaching and Learning」「英語教育研究」など）も複数履修受講し、「演習」の受講者でもあった。また全員が中学・高等学校教員志望であった。

筆者の勤務する大学の教職課程の 2017 年度カリキュラムでは中学・高等学校の英語科教員免許状の取得を希望する履修生は 2 年時に「英語教科教育法 I」、3 年時に「英語科教科教育法 II」「英語科教科教育法 III」を必修科目として履修(II と III は原則として同じ履修生を対象とし、通年履修を前提)、「英語科教科教育法 IV」を選択履修した。「英語科教科教育法 II」「英語科教科教育法 III」は 4 名の教師教育者が担当・開講し、各定員 25 名である。どの担当者の授業を受講しても「英語教科教育法 I」で学習した理論を基に、

中学・高等学校の英語教師に必要な基礎的授業力・指導力を習得することを共通の目標とし、模擬授業の実践とふり返し、他の受講者の実践の観察・分析を通して効果的な授業や指導法について考えることが授業の主な概要である。また、筆者の授業では中学・高等学校の教科書を用いて教案と教材を作成、フィードバックをもとに書き直した教案や教案に基づいた模擬授業実践後の自己評価エッセイなどとともに各自でポートフォリオを作成して提出させ、評価の対象としている。

一方、教室という場で授業実践を実際に体験する教育実習中、教職課程履修者は大学では「教育実習」という科目に登録するものの、実際の指導は実習校が行っており大学では教育実習前後も含めて授業が行われていない。そのため実習先での実践及び彼らの学びと成長は、演習担当教員による訪問・研究授業観察及び実習後に提出される教育実習日誌によってのみ窺い知れるに過ぎず、「教育実習 I/II」の評価も教科教育法担当者ではなく演習担当教員が実習校での評価をもとに行っている。つまり、理論と実践を往還しながら大きく教師として成長する貴重な時期に教師教育者あるいはピアである他の教職課程履修者による支援体制がないことが大きな課題となっている。

教育実習時の教職課程履修者の学びと経験をより豊かなものにするために、また彼らが切り取る瞬間や出来事を教師教育者やピアと協同で後にふり返し、継続的な学びへの気づきを容易にするために、教育実習中の省察のツールとして J-POSTL を活用した。次節でその取り組みについて報告する。

3.教育実習における J-POSTL の活用事例

本稿は J-POSTL の教育実習中の活用事例であり、Orlova(2011)の提唱している EPOSTL の教員養成段階での活用法の6段階の内の第5段階に特に焦点を当てた事例である。活用にあたっては図1のような段階を踏んでいる。

■**利用時期**： 5月～6月（教育実習前～教育実習後）

■**利用箇所**：「自分自身について」と、「自己評価記述文」から「V 授業実践」1分野15記述文を利用

■**実践の概要**

実践の具体的な手順と内容は以下の通り。

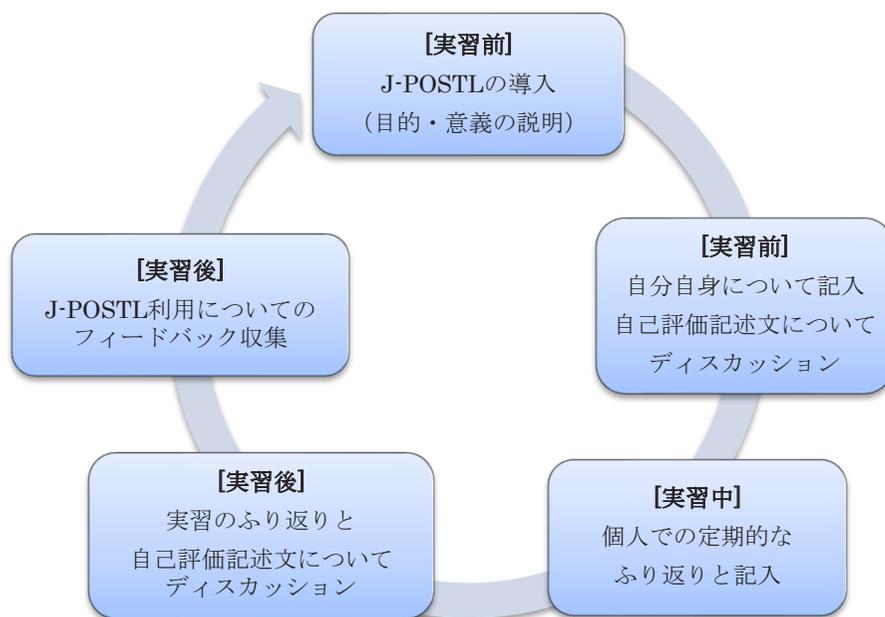


図1. 教育実習時における J-POSTL 活用モデル

① 教育実習前

まず J-POSTL を導入し、その意義と目的を説明した後、12 ページを用いて「教育実習の指導で楽しみにしていること」「教育実習の指導で不安に思っていること」の2点について個々に記述させ、その後ペアで考えを共有する時間を持ってもらった。ついで、その際に使用する15の自己評価記述文提示と実習中に行う省察のプロセス（下記の②を参照）の説明を行った後、それぞれの自己評価記述文の理解と選択について協同で話し合ってもらった。今回の事例ではどの参加者も実習校の現状をよくわからない段階で自己評価記述文をいくつか選択することが困難であると判断したため、最後に15記述文すべてについて個々に振り返らせ、その時点での段階を自分で評価し記入してもらった。

② 教育実習期間中

3週間の実習期間中、教育実習生は第1週目の週末、第2週目の週末と教育実習直後の計3回、15記述文を参照しながら実習の内容を自ら振り返り、それぞれの記述文についてその時点での段階を自己評価し記入した。また記入した年月日をそれぞれ記載した。

③ 教育実習後

実習後は実習内容と計4回にわたって自己評価記述文について記入した段階をふり返し、その上で「実習を通して以前は出来なかったけれどもできるようになったこと」「今の英語教師としての自分の課題」の2点について個々に記述してもらった。その後、それぞれペアで筆者と面談を行い、ふり返しを通して授業実践と経験について問いかけ、自己評価の分析・解釈を協同で行ってもらった。

■ 指導上の工夫や留意点

ここで報告した取り組みにおいて一番重要なのは協同で自己評価をふり返ることである。ただし今回は授業内で行う活動ではないため、教職課程履修者2名がペアで行い、教師教育者である筆者も参加した。教員養成段階において省察活動が必ずしもスムーズにいかない場合は認知的、社会的、専門的にもより近い立場にあるピアの存在を重視する、段階を踏んで活動を行う、リフレクションのための活動や手法を複数種類行う、などの対応策が必要だと Yoshimoto Asaoka (2015) は述べている。特にピアは自分にはない経験や資質能力を持っているが、到底真似できないような技術を持ついわゆる「達人」よりは近い立場で経験の意味や新たな解釈と一緒に考えてくれる仲間であり、共通する点も多くあることからエンパシー（共感、感情移入）が生まれやすいため、協同でのふり返りが効果的であると考えられる。また、協同でふり返しを行うもう1つの目的は、実習校の実情と環境によって異なるそれぞれの体験を他者と共有することで、自分の教育実習体験は1つの文脈にすぎないことへの気づきが生まれることである。実習校によっては関係のない自己評価記述文（例えば「英語を使って授業を展開するが必要に応じて日本語を効果的に使用できる。」[V-E-1]）について、実習校で日本語で主に指導するよう言われ、英語を使用できなかったケース）もあるが、実習後に他者とふり返ることによって、この能力はこれからの長い教師というキャリアの中では継続して成長させるべき能力であることへの理解を深めることができる。また自己評価の内容を共有することで自分の体験について自分の解釈とは異なる別の解釈が生まれることも期待できる。ペアの組み合わせを今回は自由に組ませたが、中学・高校の校種や私立・公立などを考慮してもよいだろう。

次に自己評価を継続して行うことが重要である。継続して行うことによって、実習前に決めた焦点を実習校の実情と環境に合わせて自由に変化させてよいことに気づき、また短期間ではあっても自分の立てた目標が実践を通してできるようになるという実感を得ることができる。また以前の自己評価と

比較することによってうまくできるようになった、あるいは思ったほどうまくできなかった場合にその理由や原因をふり返って分析・解釈するきっかけとなるだろう。また教育実習期間中に直接指導や支援に関われない教師教育者にとっても、教育実習生の成長と変化の一面を観察し評価する手助けになると言える。

さらに、自分のふり返りを記述したのちに口頭でも表現する場を提供することが大切である。自己評価記述文で表現されている資質や能力は抽象的であり、5段階の数字で自己評価を表すことに戸惑う履修生も多い。そのため、実践における具体的な場面や出来事を思い出し、その切り取った出来事について解釈し、時間をおいてそれを自分の言葉で表現する場が重要なのである。Orlova(2011)も、教育実習前には教育実習生は自分の感情に焦点をあてて、印象的な感想文を書くことが多いが、実習後はより分析的に書けるようになると述べている。そのためにも実習前後の記述と面談によるふり返りはこの取り組みにおける重要な段階であると言えるだろう。

今回の事例の参加者の1人の実習前後の記述を例として以下に挙げる。

[教育実習生 A 実習校：公立中学]

実習前

教育実習の指導で不安に思っていることは：

- ・生徒とうまく接することができるか。
- ・授業をうまく展開することができるか。
- ・授業中に英語をスムーズに話せるか。
- ・ALTとのチームティーチングをうまく展開できるか。

実習後

教育実習を通してうまくできるようになったことと課題：

- ・Classroom English を使って生徒に具体的な指示出しができるようになった。また、ジェスチャー等の言葉以外の伝達方法が豊かになった。
- ・生徒の様子を伺って授業の展開を若干ながらもその場で工夫することができるようになった。
- ・全ての授業は生徒理解の上に成り立っていることを学び、実習中にはあまり実践できなかったことなので生徒とできるだけ多く関わる姿勢を身につけたい。
- ・ALTとのコミュニケーション不足で授業が時々スムーズにいかない時もあったのでそれを改善するためまた授業のためにも自分の英語力を高めなければならない。

- ・生徒間での学習活動中にどのように学習支援をすればよいかわからなかった時が多々あったので生徒理解と関係するが生徒1人ひとりに適切な支援を行えるようになりたい。

教育実習中の J-POSTL の活用について、実習校での指導担当者との共有が難しいことが大きな課題である。また今回の事例では大学から指定されている教育実習日誌への記入に加えての課題であるため、教育実習生の負担も考慮せざるを得ない。教職課程全体での取り組みとすることが今後の課題である。

4. おわりに

本稿では、Orlova(2011)の提唱する6段階の第5段階目、教育実習中における J-POSTL の活用事例について報告した。3週間という短期間の教育実習ではあるが、短期間だからこそ達成すべき目標を明確にする必要があり、教育実習生にも成長と変化を実感してもらいたい貴重な場である。またその目標を現場の実情に合わせて変化させることを許容する必要もある。一方、大学側が実習校と緊密に関わることが難しいことが多いため、教師教育者にとっては J-POSTL を活用することによって教育実習生に身につけてほしい資質や能力を一緒に考え、また、継続したふり返りの記録を見ることによって彼らの成長や戸惑いを間接的に理解・評価する機会となる。教職課程履修者にとっても、自分の教育実践をふり返し、自らに問いかけ、分析・理解をするというリフレクティブ・プラクティスの一連の流れを経験できる重要な段階において、J-POSTL を省察のためのツールの1つとしてぜひ活用させたい。

最後に今回参加した教育実習生に、3週間の J-POSTL を活用したふり返りの活動自体について面談中に語ってもらったので以下にいくつか抜粋して記載しておく。

【教育実習生 B 実習校：公立高校】

一括してこういうものがあると教師自身をふり返ることができてよい。実際に能力が上がったか上がらなかったか、一週間ごとに客観視できるのがよい。何かしら定期的にふり返る活動はよいのかなという気がする。

【教育実習生 C 実習校：公立中学】

第1週目はよかったけどできなくなったりした項目もあったが、全体的にみたら自分の中でよくなっているなと思えた。授業の面だけではなく、生徒と

の関わりとか、現場に立って見ないとわからないことしかなかったが、一つ一つ項目化されていると自分の中で整理しやすかった。

【教育実習生 D 実習校：公立高校】

最初1週目につけた時は自分で授業をしたことがなかったのでこれが授業のどの部分に相当するのかわかりづらく想像がつかなかったが、段々これは授業のこういう部分に相当するのかなというのがわかってつけやすくなった。傾向的に1週目より2週目の方が自信がなくなっている。2週目に授業をやってみて今までできるかなと思っていた項目ができてないことがわかった。次の週になるとコツがつかめてきて段々改善された。終わってみたらこれだけつかめたのだなと理解できた。

引用文献

- Orlova, N. (2011). Challenges of integrating the EPOSTL into pre-service teacher training. In Newby, D., Fenner, A.-B., and Jones, B. (eds.) *Using the EPOSTL*(pp.19-28). Strasbourg/Graz, Council of Europe Publishing.
- Yoshimoto Asaoka, C. (2015). *Mitigating the Disparity between Theory and Practice: EFL Student Teachers' Perspectives and Experiences of their Professional Development*. PhD Thesis. University College London.

英語科教科法の授業における J-POSTL の統合的な活用 —通信課程における実践—

清田洋一（明星大学）

1. はじめに

本稿は、「英語科教科法の授業における J-POSTL の統合的な活用法」（清田，2015）を，JACET 教育問題研究会が進めている教職課程 J-POSTL 活用プロジェクトの趣旨に沿って，書き換えたもので，英語科教科法の通信制スクーリングクラスにおける J-POSTL を使った実践報告である。

通信制スクーリングクラスの実践を対象に取り上げた理由は，他の通学課程を対象にした実践例と違う示唆を得られる可能性があることである。具体的には，通学課程と比べて，教職課程での学びにおける自律性が高いこと，そして，スクーリングのクラスを構成する参加者の多様性である。通信制の学生は，対面での授業時間の代わりに，一般的に，自分の学習のニーズから，自律的に学習を組み立てている。また，参加者は年齢層や職業も多様であることから，グループワークなどでバックグラウンドが異なる学生同士が意見交換をできる可能性がある。J-POSTL は，言語教師として将来必要となる授業力に対して理解を深め，自己の能力への自己評価能力を高めるためのツールで，「自律性の高さ」「多様な参加者同士の意見交換」という要素が，J-POSTL の効果的な活用につながると考えた。また，スクーリング修了後，集団学習から個別の学習スタイルに戻った際の J-POSTL の使い方についても，有意義な示唆が得られることを期待した。

言語教師の内省を高める取り組みについて，Farrell (2014, p.8)は次のように言及している：「言語教師は，自身のビリーフや実践について積極的にデータを収集することから，実際の省察に取り組むことができ，そうして，自分の今後の指導について決定を行う（著者訳）」。しかし，学生の場合は，このデータに対応するものがない。この課題を解決するためには，教職課程の授業では，J-POSTL の各記述に関連した技能をさらに具体的に把握できるように支援する取り組みが必要であると言える。

また，自己省察力の向上には，自分の授業力を客観的で多様な視点から検討できることが必要になる。しかし，教師として必要な授業力を考える時に，学生は自分自身で授業を行った経験がほとんどないため，自分の学習経験という狭い枠にとどまりがちで，自分が受けた授業が基準になってしまう。現在，学校現場においては，教師が中心で言語材料に関する一方的な解説や和

訳中心の授業から、目標言語を使うことを前提とした学習者中心の Communicative language teaching (以下、CLT) への転換が求められている。CLT の授業を促進させるためには、旧来の単語や文法事項の暗記といった授業傾向から、学習を通じて言語使用者を目指していく、行動志向の言語学習に必要な授業力を検討しなければならない。しかし、学生の中には実際に CLT に基づいた授業を体験した者もいれば、知識としてのみの認識に留まる者もいて、ばらつきがある。そこで、CLT に基づいた授業を直接体験していなくても、自分の学習経験だけに留まることなく、様々な授業形態に対応できるように広い視野を持つことが必要となる。今回のスクーリングでは、J-POSTL を活用して、授業実践に必要な技能を具体的に理解することと、多様な視点から検討する姿勢を持つという2点を解決すべき課題として取り組んだ。

2. 授業における J-POSTL の活用のポイント

上記の課題をふまえて、J-POSTL を効果的に活用して、自己省察力を高める教科法の授業を行うには、次の2点が必要であると考えた。

- ・自分が取り組もうとする授業を具体的にイメージできる活動
- ・様々な英語学習の経験を背景とした、多様な視点から授業力を検討できる意見交換

「自分が取り組む授業を具体的にイメージできる活動」に関しては、授業に使用する教材単元を基に、実際に指導案を作成した。その際、CLT の観点からの授業を促進するため、その単元で目指す lesson goal として、学習者が取り組む Can-do リスト形式の自己評価も設定した。この Can-do リスト形式の自己評価は、スクーリングにおいて指導案作成の取り組みに使用する教科書の単元を基に作成した。その理由は、Can-do リスト形式の自己評価の設定から、バックワードデザインとして、目標言語に関する知識の習得だけでなく、言語の働きの習得を授業の目標とすることができることを期待した。

また、「様々な英語学習の経験を背景とした、多様な視点から授業力を検討できる意見交換」に関しては、J-POSTL を活用して、具体的な授業力への共通認識に立ったグループ・ディスカッションが有効であると考えた。特に、通信制の学生は、普段は各自で指定テキストや推薦された参考図書など使って主に文献を使った学習を行っている。その意味で、担当教員と他の学生との集団学習の場であるスクーリングという集中授業は、他の学習者や担当教官と意見交換ができる貴重な機会となり、その効果をより実感できると考えた。

J-POSTL の基となった EPOSTL は、その目的の一つとして、その Information Guide に以下のように示唆している。“it can serve as the springboard for discussion”「ディスカッションのためのきっかけとしての役割もある（著者記）」。また、このディスカッションの活用に関しては、EPOSTL の USER’ S GUIDE のセクションにおいても、次のように示唆している。「単なるチェックリストとなるのではなく、学生、教師教育関係者、学校現場におけるアドバイザーの間で議論の活性化を促進することが重要である（著者記）」。EPOSTL では、この活性化した議論を通じて、学生が言語教師に必要な授業力への意識を高めていくことを目指している。EPOSTL と基本的な構成は同じである J-POSTL においても、そのテキストに、「教職課程の履修生、現職教師、実習や教員研修の指導者・メンターなどが利用したり、お互いの意見を交換したりする際に、省察を深めるツールとして機能する」と記して、議論の活性化を促進させるツールとしての役割を明確にしている。そこで、スクーリングという集団学習の場でのディスカッションを通じて、受講者同士の意見交換の活性化につながることを期待した。その際、J-POSTL の役割は、受講者に対してディスカッションの共通の基盤となる授業力の具体的な視点を提供することになる。

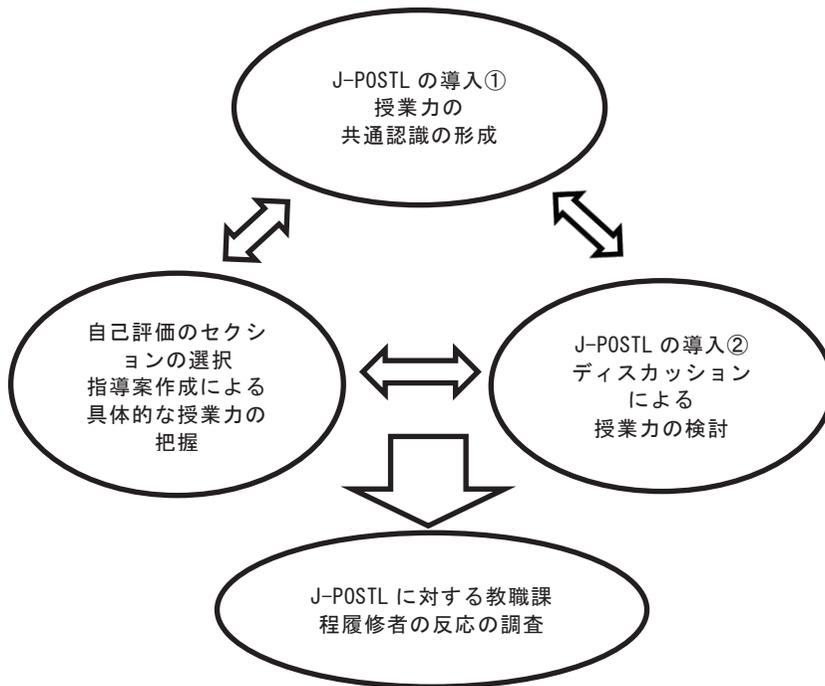


図 1. J-POSTL の活用方法

また、今回の実践研究では、通信制スクーリングクラスにおける学生が対象となるが、受講者は全員社会人で実社会での英語のニーズをよく理解したものが多く、また、その職種も学校の支援員、塾講師など実際に英語教育関係者も多く、実際に教職を目指す意欲も高い。年齢層も様々で、期間も2日間と短期である。受講者の背景や期間を考えると、J-POSTL の現職教員への研修などへの活用の示唆が得られることも期待できる。

2.1 Orlova「6つの段階」における J-POSTL の活用

今回の教職課程のプロジェクトでは、第1部で紹介されている EPOSTL 活用の「6つの段階」(Orlova, 2011) を実践報告の基本的な枠組みとしている。本授業で行っているのは、「J-POSTL の導入」(段階1)、「自己評価のセクションの選択」(段階2)、「自己評価記述文の授業での活用」(段階3)、「J-POSTL に対する教職課程履修者の反応の調査」(段階6)の4つである。このサイクルを意識した J-POSTL の活用を詳細に示したものが図1となる。

2.2 授業環境

今回報告する授業は、2014年8月に開講された通信制の講座「英語科教育法3」のスクーリングである。本授業は、英語科教員免許状の取得を希望する通信制の学生にとって必修の授業で、英語科教育法の基礎的な科目である1、及び2を受講後に、英語の授業における実践的な技能を理解することを目的に受講する。通信制の学生は、普段、指定された教材を使用してレポートの課題に取り組むという学習を行っている。スクーリングでは対面授業となるため、実践的な技能の理解を促進する取り組みが求められている。スクーリングの授業は大学の通学課程の夏期休業中の2日間で、1日3コマの計6コマで構成されている。

2.3 授業内容

以下の形式でスクーリングの授業の導入活動から、最後の指導案の作成と発表までを行った。具体的な内容として、まず、グループ・ディスカッションの基本的な導入のテーマとして、J-POSTL の「I 教育環境:A. 教育課程」、「B. 目標とニーズ」、「C. 言語教師の役割」の記述文を使用して、自分の経験を振り返りながら、意見をまとめた。さらに、グループ内で相互に意見交換し、グループ毎の発表を行った。

この後、基本事項の確認として、学習指導要領における小学校、中学校、及び高等学校の外国語学習の目的を確認した。さらに、今回の指導案作成の際に必要な知識として、各単元における lesson goal を学習者が Can-do リ

スト形式で自己評価することについて解説した。その後、検定教科書（*All Aboard. Book I, Lesson 4*, 東京書籍）の単元を基に、指導案の作成に取り組んだ。その際、自分が作成する指導案において重要と思われる授業力を、J-POSTL の「Ⅱ教授法」の記述文で確認しながら、グループ内でディスカッションを重ね、最終日のグループ内発表を行った。指導案の作成について、時間的な制約を考慮し、略式のものとした。基本構成は以下の通りである。

- ・単元の lesson goal としての Can-do リスト形式の自己評価記述文
- ・導入活動
- ・内容理解活動
- ・自己表現活動
- ・評価

2.4 受講者

スクーリングの受講者は社会人中心で、38 名が参加した。職業は以下の通りである。英語の教科法を学んでいない小学校教員、塾講師、小学校の支援員など。

3. アンケートによる参加者の意見

3.1 導入活動としての J-POSTL の項目：「自分自身について」

スクーリングの導入として、これまで自分自身の英語学習、あるいは英語の指導に関わった経験から、「良い英語教師の資質」と「残念な英語教師の資質」について、各自振り返り、その結果について意見交換を行った。

この活動は、今回の取り組みの柱の一つとなるグループ・ディスカッションの手順の紹介を目的に実施した。まず、J-POSTL の項目にある「自分自身について」の「Ⅰ. 過去の英語学習経験」の項目について各受講者が記述し、その後、グループ・ディスカッションを行った。その後に、交わされた意見から、J-POSTL の「Ⅰ教育環境：A. 教育課程」、「B. 目標とニーズ」、「C. 言語教師の役割」、「Ⅱ教授法」の記述文との関連性を検討した。

その結果、「良い英語の教師の資質」と「残念な英語教師の資質」について、以下のような傾向が浮かび上がった。

「良い英語の教師の資質」（（ ）内の数字は同傾向のコメント数）

- ・ 授業に積極的に取り組む雰囲気作りができる (6)
- ・ 教師と生徒、および生徒同士のインタラクションを活性化できる (5)
- ・ 4 技能のバランスを調整できる (3)
- ・ 授業のねらいを明確にできる (2)
- ・ 自己表現の機会を多く提供できる (2)

- ・ その他：達成感，生徒の主体性の促進，興味・関心の向上，教師が明るい

「残念な英語教師の資質」

- ・ 一方的で，生徒とのコミュニケーションがない(5)
- ・ 和訳中心で教科書を消化するのみ(3)
- ・ 文法を形式的に解説するだけ(2)
- ・ その他：いつも決まった方法を繰り返すだけで，工夫がない，教師が暗い

「良い英語の教師の資質」として多かったのが、「雰囲気作りができる（間違いを怖れないなど）」と「教師と生徒，および生徒同士のインタラク션을活性化できる(5)」であった。「残念な英語教師の資質」として多かった項目が「一方的で，生徒とのコミュニケーションがない(5)」であることを考えると，「授業における教師と生徒，および生徒同士のインタラク션을活性化できる能力」を重要視する受講者の傾向が浮かび上がった。その傾向は，従来の教師主導型の文法・訳読中心の授業ではなく，CLT 志向の授業に重なることを確認した。

そこで，CLT の授業の基本と，それを促進するために必要な授業力とは何かという質問を投げかけた。学生から，「CLT の授業では基本的に学習者中心となること」，「具体的には学んだ言語材料を実際に使ってみることが重要」となるという意見が出された。その意見から，「授業における教師と生徒，および生徒同士のインタラク션을活性化できる能力」が必要となることを共通認識として確認することができた。また，受講者はこの導入活動を通して，個別の意識を集団の場で話し合うことで，それが共通認識の構築につながる可能性を理解し，グループ・ディスカッションを本授業の主要な活動として取り組むことを確認した。

3.2 授業後の自由記述

3.2.1 教師としての意識・資質に関するコメント

この項目は，J-POSTL の「C. 言語教師の役割」の記述文に関連する。受講を通して，その学習の取り組みが教師としての意識，あるいは資質に関して何らかの気づきにつながったと考えられる記述である。内容は大きく，「教師としての心構え」，「生徒が英語を学ぶ理由への意識（コメント数:5件）」の2つのテーマに分類された。最も多かったのは，「教師としての心構え」であり，コメントの総数は11件であった。そして，「生徒が英語を学ぶ理由へ

の意識」のコメント数は5件であった。以下にその特徴的な数例を示す（下線は著者による）。コメント数は16件である。

(1) 項目のテーマ：「教師としての心構え」

- ① 授業を通して全体的に感じたことは、学び続けないといけないということです。今回一単元の内容を中心に指導案作りをしましたが、自分の能力のなさを痛感しました。また、基礎的事項である学習指導内容も全然身につけていないことが分かり、たくさん良い反省材料を、課題を与えられた授業でした。
- ② 勉強不足、教員になる心構え不足でしたが、授業を受けていくうちに、その心構えがどういうものなのか、だんだんと自分なりにできてきました。
- ③ 授業でどのような授業をすればよい授業になるのかをひたすら考えさせられて、今まで自分の受けてきたものが、ダメな時もあったと気づいたと同時に、じゃあどうすれば改善できるのかどうかを考えさせられました。
- ④ 昨日と今日を通して驚いたのは、一つの教材でも、こんなにアプローチの仕方がいろいろあり、研究しても足りないんだ、ということです。一つ一つの教材の導入、展開を考えだしたらきりがなく、教師はいくら時間があっても足りないですね。私も音楽の教員をしているので、今回学んだこと、その姿勢を生かして、現職でも教材研究をさらに頑張りたいと思います。自分の授業が将来教え子たちに残念な授業の例として挙げられたら悲しいので・・・。

上記の例からも分かるように、「教師としての心構え」のテーマでは、①、②の例のように自分の能力不足を認識することから、学び続けることの重要性に気づいた場合と、③、④の例のように、教師としての職業の特徴と専門性から学び続けることの重要性に気づいたコメントが多く見られた。

(2) 項目のテーマ：「生徒が英語を学ぶ理由への意識」

- ① まず最初に感じたことは、きちんと小中高の英語（外国語）科教育の違いと役割を理解しなければならない。今まであまり気にしていなかったという事です。また、「何のために学ぶのか」を明確に言えない自分があることにも、そのことを今までなぜ考えなかったのかということにも自身で驚きました。きちんと考え、確実な答えを持っていないとは思いません。
- ② そもそも英語を教えたいと思っていたのに、学習指導要領の英語

を学習するための目的なんて考えたことが無かった。授業の最初にまずそれを学ぶことが出来たのはすごくわかりやすかった。

- ③ この授業を受けたことにより、今までなかなかリアリティを持って考えることのできなかった「自分が英語の授業を行うこと」について、具体的に学び、疑似体験の一手手前を行うことができ、非常に有意義でした。どんなに「世の中の的に」英語を話せる（使える）と良い理由がたくさんあったとしても、生徒にとって、リアリティを感じられるものでなければ、モチベーションには繋がりません。英語への動機づけを一人一人が見つけたことになることが大切なんだと気づかされました。
- ④ 僕は英語教師になるにあたって、生徒に英語を勉強することに対する意義をどう伝えていくか悩んでいました。しかしこの授業を通して、どう伝えていくか、そのヒントをいただきました。僕の中で一番の収穫です。

このテーマは、J-POSTLの「B. 目標とニーズ」に関連する。①、②のように教師として自分自身が「英語を学ぶ理由」を明確に説明できないケースと、③、④のように自分は認識しているが生徒自身に気づかせることの難しさを認識したケースに分かれた。

3.2.2 指導方法全般に関するコメント

(1) 項目のテーマ：「授業の構成に関して」

- ① (i)指導方法を考える上で、押さえるべきポイントが分かった。(ii) 4技能の組み合わせという新しい視点を得た。(iii)単元によって教え方は変えるべきだという視点を得た。(iv)自己表現活動は題材材を活かすことと、文法事項を活かすことの2点から考えられるようになった。(v)初めて英語での授業風景が見られたので、イメージが出来た。→もっと見たい、フレーズも知りたい。
- ② 私は現在国語の教師なので、自分の勤務先で、実際どのように英語の授業をすればいいか、見学したのですが、みんなバラバラで、かえって混乱していましたが、本講義を受講させていただき、授業の枠組みをイメージ出来たように感じました。特に4技能をバランスよく身に付けさせるという視点は、自分自身欠けており、「ただ話すだけ」、「ただ書くだけ」、という極端な授業をしないように心がけようと思いました。また、教科書を表紙から最大限利用することも重要なのだという事も、学ばせていただきました。
- ③ 授業に関しては、僕は塾の講師をしていて、いつも読み書き文法

を中心とした授業をやっているのですが、それ以外のリスニングや、自分で表現するという活動に新たなおもしろみを感じました。それらを行うことで、読み書きの能力を伸ばすことも可能だと思います。

- ④ 授業をどのように構成していけばよいかをグループ活動や、実際に指導案を作成することで知ることが出来た。

J-POSTL の「Ⅱ教授法」の記述文に関連する内容である。授業の構成に関しては、基本的な授業の構成を学ぶことができたという趣旨の内容が多く、特に4技能のバランスという視点の重要性に気づいたというコメントが多かった。また、グループ活動と指導案作成の取り組みが気づきの支援になったというコメントもあった。

3.2.3 グループ・ディスカッションに関するコメント

「2. 今回のスクーリングのポイント」でも述べたように、グループ・ディスカッションによる授業力の検討も今回のスクーリングの主要なポイントであった。アンケートでもグループ・ディスカッションという取り組み自体に多くの記述が見られた。コメント数は14件である。

- ① 教育現場での経験がないため、授業内で飛び交う言葉の意味すら分からず、ただただ同じグループの人の意見を聞かせてもらっていたように思います。しかし、それが同時にとても新鮮であり、たくさんのことを吸収させていただいたと思っています。中でも、指導案については、テキストだけ読んでいただけでは得ることのできない内容も学ぶことが出来ました。自分には書けないと思っていましたが、仲間や先生のアドバイスがあり、なんとなくではありますが、書けた気がしています。
- ② 英語科の指導を実際にはやったことが無く、指導案を作ることもなかったのが最初は何もイメージが出来なかったが、グループワークがとても盛んだったため、他の人の意見をたくさん取り入れてイメージが少しずつできるようになった。
- ③ グループワークが多かったことがよかった。通常であればなかなか他の人の意見を聞くことはできないが、自分の意見と交換することが出来、考え方の幅が広がったと感ずることが出来た。
- ④ 今回のスクーリングで様々な人々の意見、考え方を聞いて、非常に参考になるものもあったし、そんなやり方もあるんだと認識することが出来たので、非常に収穫のある2日間であった。

コメントのテーマとして、2つに大別できた。それは、①、②の例のよう

に、グループ・ディスカッションが、指導案作りなどのスクーリングでの学習活動の直接的な支援になったとするものと、③、④の例のように、多様な意見を聞くことで自分の視野を広げることができることにつながったという間接的な支援とする2つに分かれた。

3.2.4 J-POSTL の記述に関するコメント

受講者にとって、授業力に関する自己評価ポートフォリオは初めての取り組みだったようで、J-POSTL について積極的に評価するコメントが多かった。

- ① 自己評価で一つ一つの活動を振り返ることが出来たのも、後から見直して自分の成長がわかるので、これからが楽しみになってくる。
- ② 本講義を通して、ポートフォリオの重要性を感じた。自己評価、振り返りを行うにあたって、記録できるものであり、改善、また今現時点においては、質問項目について、自分ならどのような活動をするのか、どんな指導を行うのか、熟考しなければならないと感じた。

3.3 個別インタビュー

今回のスクーリングの受講者の一人に対してフォローアップ・インタビューを行った。インタビューでは、今回のスクーリングの取り組みにおける主要な構成について、テーマを明示し、それに対して意見を求めた。受講者は、30代の社会人の女性で、勤務先は英語に直接的に関連する仕事ではないが、1か月に1度程度は英語を使用する機会がある。また、その実家は海外からの学生のホームステイ先となることが多く、実社会での英語のニーズをよく理解している。以下は、そのうちJ-POSTLに関するコメントである。(下線部は筆者)。

J-POSTL を使用して、授業力に関して、自分で評価する意識を持つことに関して、その感想を聞いたところ、以下のように答えていた。

「英語教師として必要な能力は多岐に渡るということは、教職課程で感じ取ることができませんが、いざ具体的にどのように力をつけていったら良いかと思うと、何から手を付けてよいか、分からなくなります。具体的な視点をもって、必要な能力と自分の実力について、自己確認することのできるポートフォリオは、とても画期的なツールであると思いました。自分が英語を扱えることと、それを人が使えるようになるように教えられることは大きく異なる能力です。ポートフォリオを使うことによって、それまでの経験から何を

生かせるのか、そしてどのような能力が足りないのかを、分析することができます。自分の経験・得意分野を生かしつつ、新たに成長するためには、きちんと学習/準備が必要であるということを、意識させられる内容でした。また、スクーリングの時間で学ぶことができる内容は限られているが、スクーリングをきっかけに、この先も自分で学んでいかなければならないということ、認識させられました。この先も何度も使うことができる、とにかくありがたいツールを頂きました。」

このコメントからは、この受講者が教職の専門性とその成長の継続の重要性を理解した上で、J-POSTL を使用した自己評価に対して、積極的な意義を見いだしていることが分かる。

4. おわりに

通信制のスクーリングで J-POSTL を活用する取り組みで目指したことは、学生同士の効果的な意見交換の場の提供と、それに基づくそれぞれの授業力の理解である。通信制という普段は顔合わせない、バックグラウンドが異なる学生同士にとって、J-POSTL は共通理解の基盤となり、最終的には言語教師として将来必要となる授業力に対して理解を深めることにつながると考えた。

取り組み後のアンケート、およびそれに続く個別インタビューの内容を考えると、今回の J-POSTL を活用した一連の取り組みにおいて、それぞれの学生の学びの過程が可視化につながり、結果的に受講者の授業力への意識を高める効果があったと言えるだろう。学生はスクーリング修了後、集団学習から個別の学習というスタイルに戻る。その際に、自分の成長の過程を振り返りつつ、自分に必要な学びを実践していく際に、スクーリングでの学習経験を基に J-POSTL を活用して自律的に課題や方向性を確認できるだろう。

「集団での意見交換と情報収集」、そしてそれに続く「個人における省察を通じた学びの進化」という過程は、通学課程での教科法の授業においても、教師の自律的な成長を考える上で応用可能な示唆となっている。

参考文献

- Farrell, T. (2014). *Promoting Teacher Reflection in Second Language Education A Framework for TESOL Professionals*. Routledge.
- Farrell, T. & Jacobs, G. (2010). *Essentials for Successful English Language Teaching*. Continuum International Publishing Group.
- Fenner Anne-Brit. (2012). The EPOSTL as a Tool for Reflection. In D. Newby (ed.) *Insights into the The European Portfolio for Student Teachers of Languages (EPOSTL)*.
- JACET 教育問題研究会 (2011). 『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』平成 22 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (代表: 早稲田大学 神保尚武) 研究成果報告書
- JACET 教育問題研究会 (2013). 『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (代表: 早稲田大学 神保尚武) 研究成果報告書
- JACET 教育問題研究会 (2014). 『言語教師のポートフォリオ (英語教職課程編)』
- 清田洋一(2012). 「授業で多く英語を使う行動志向的アプローチのすすめ～教科書に基づく 1 年間の指導の達成目標と Can-do リスト～」『英語教育』大修館, 2013 年 1 月号
- 清田洋一(2015). 「英語科教科法の授業における J-POSTL の統合的な活用法」 Language Teacher Education Vol.2, No. 1, JACET 教育問題研究会会誌
- Newby, D., Allan, R., Fenner, A.-B., Jones, B., Komorowska, H., & Soghikyan, K. (eds.). (2007). *The European Portfolio for Student Teachers of Languages (EPOSTL)*. ECML/Council of Europe.
- Orlova, N. (2011). Challenges of integrating the EPOSTL into pre-service teacher training. In Newby, D., Fenner, A.-B, and Jones, B. (eds.) *Using the European Portfolio for Student Teachers of Languages* (pp. 19-28). Strasbourg/Graz, Council of Europe Publishing.

付 録

『言語教師のポートフォリオ』導入へのストラテジー

『言語教師のポートフォリオ』(J-POSTL)を英語教職課程に導入し、その教育効果を促進するためには、ある種の戦略が必要です。以下、基本的な導入戦略を紹介します。

導入への準備

1. J-POSTL の内容と理念を十分理解する。
2. 英語教職課程の編成、担当の講座・実習指導などと J-POSTL との関連性を明確にする。
3. 英語教職課程の編成、担当の講座・実習指導などに J-POSTL の内容を組み入れる。(例:自己評価記述文の 7 分野のうちどの分野を、あるいは、どの領域を、あるいは、どの記述文を重点的に組み入れるかを決める。)
4. 担当の講座の履修生に J-POSTL を紹介するための可能な方策を考案する。(例:主な 3 つのセクション(自分自身について、自己評価記述文、ドシエ)のうち、どのセクションから使い始めるかを決める。)
5. J-POSTL を使って授業力や省察力を高める方法を科目や実習担当者間で議論し具体的に示す。(例:模擬授業などを録画し、自己評価記述文を利用しながら省察させる。/教育実習の際に、実習校の指導担当者と連携を密にし、J-POSTL の使い方について共通認識を持つ。)
6. 履修生に対し、J-POSTL は教師教育の国際的な自己評価ツールであるという認識を高める。(例:序文を利用するのは当然として、本研究会やヨーロッパ現代言語センター(ECML)のホームページ(<http://epostl2.ecml.at>)から必要な資料をダウンロードして活用する。)
7. J-POSTL の活用方法を、使用目的や対象学生の現状に合わせて研究する。
8. 履修生のフィードバックを収集する。

勤務校の教職関連科目担当者(同僚)との協働

1. J-POSTL の活用経験を同僚と共有する。
2. 言語教育に携わるすべての教員の協力を求める。
3. J-POSTL 活用事例の発表会を開く。
4. J-POSTL 活用の利点を調査・研究する。
5. J-POSTL の多様な活用方法について議論する(例:教科教育法、教育実習、授業での課題(宿題)、期末レポート。)

行動計画

1. J-POSTL の首尾一貫した活用方法を定着させるために、同僚と協調して実践を試みる(例:授業科目によって利用する自己評価記述文を決める。)
2. J-POSTL の具体的な活用計画(目的、内容、時間、など)を同僚と合意する。
3. 実習校の管理職や指導教員と連携する。

ネットワークの構築

1. 教職課程担当教員、実習校の指導教員、その他教師教育関係者のためのセミナー、ワークショップ、研究会などを開催する。
2. 教職関連の大学間で J-POSTL の活用や普及方法に関するコンソーシアムを組織する。

公的機関などからの支援

1. 文科省、教育委員会、言語教育関連学会、各学校の校長などに対して、研究会の開催、研究会・学会などの報告書・発表レポート・論集の送付などの手段を用いて広報活動を行う。
2. 全国的なネットワークの組織化への支援を求める。

『言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)』
教職課程における活用法

発行日 2020年3月15日

発行者 JACET 教育問題研究会

JACET SIG on English Language Education

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetededu/>

代表 清田 洋一

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学商学大学院 神保尚武 気付

電話 03-5286-2081

印刷所 有限会社 桐文社

〒142-0053 東京都品川区中延 6-2-22 エボンビル 1階

電話 03-3781-4010

本書の印刷費には科学研究費補助金基盤 (B) (課題番号: 19H01288) が使われています

英語教師必携：J-POSTL活用書2編



「教師の自己評価」で 英語授業は変わる

J-POSTLを活用した授業実践



2020年刊行（大修館書店） 現職英語教員による実践事例集

- ・教育困難校から進学校までを網羅
- ・読解中心から技能統合型の授業へ
- ・やり直し学習で生徒が生き返る
- ・生徒を自立型学習者に育てる試み
- ・協同学習・相互評価で生徒が変わる
- ・評価の工夫が授業を活性化
- ・茶道を通して育む異文化間能力
- ・校内自主研修で授業力アップ
- ・英語以外の教員にも効果を発揮
- ・授業観察のルーブリック、等々

2017年全面改訂版刊行（三修社） 英語科教育法テキスト

- ・教科教育法のロングセラー
- ・新学習指導要領に対応
- ・整合性のある構成と記述内容
- ・使いやすいレイアウト
- ・J-POSTLの真髄が分る理論編
- ・自律的な英語教師を育む実践編
- ・豊富な調査で裏付けられた記述
- ・側注の用語解説で内容理解を促進
- ・インタラクション重視の課題設定
- ・充実した資料編

